

あの時わたしは

（熊本地震をふり返る）

あの時わたしは

（熊本地震をふり返る）

「あの時わたしは」発刊によせて

社会医療法人ましき会理事長 **犬飼 邦明**

2016年4月14日21時26分、突如として起こった熊本地震は、熊本地方に甚大な被害をもたらしました。不幸にも犠牲になられました多くの皆様やご家族の皆様方に、慎んで哀悼の意を表します。

益城病院も大きな被害を受けました。病院の建物や内部は想像を絶するほど破壊され、地盤は大きくうねり断裂を見せつけました。一時は入院患者さん199名全員に転出していただき、特養「花へんろ」に診療機能を移動して仮診療を行う事態となり、病院を利用される方々にも多大なご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

あまりの被害の大きさに一時は再建も危ぶまれましたが、わが身を顧みない職員の献身的作業や励ましの言葉、また寝食を忘れてご協力いただいた建設・設備業者様のお陰で、何とか半年後の9月には、仮復旧ながら病院としての体裁を取り戻すことができました。加えて全国から数多くのご支援、ご声援を頂きましたことに改めて深く感謝申し上げます。

1年が経ち、本格復興はまだまだ先のことではあ

りますが、一つの区切りとして、2017年4月15日に1周年記念行事「今日まで、そして明日から」を開催しました。院内で、職員や患者さんによる手作りのステージや模擬店を開きました。そして、この一年間に起きたさまざまな出来事を記録写真として展示、併せて益城病院復興計画「PLAN2020」のパネル展示も行いました。職員慰労会には、福岡大学名誉教授の西園昌久先生を講演にお招きしました。

古傷をえぐるように体験を記録にとどめることには、ためらいもありました。しかし、自ら被災しながらも熊本地震という貴重な経験を職員と共有し、励まし合いながらこれまで必死に耐えて来た事実を、長く記憶にとどめておくのも務めだと思い、本書を企画しました。他にも書ききれなかったいろいろな苦労や目につかない活躍がたくさんあったと思います。言葉に尽くせぬ感謝の気持ちを込めて、本書を益城病院職員と、病院復旧にご尽力いただいた全国の支援者の皆様全員に捧げます。

2017年4月15日 益城町惣領1530にて



発刊によせて	2
第1期 ドキュメント3日間	5
タイムライン第1期(4月14日～4月16日)	8
ドキュメント3日間	14
病院機能停止と199名の大移動	20
第2期 本部機能を担った「花へんろ」	23
タイムライン第2期(4月17日～4月28日)	24
応急外来、避難所、本部機能を担った「花へんろ」	25
臨時外来診療の開始	26
感染対策チームの活動	27
職員の仮避難所と育児施設を院内に確保	28
支援者であり被災者でもある私たち	29
ボランティアと支援	30
精神科病院機能と災害支援	38
第3期 病院機能再生へ	39
タイムライン第3期(4月29日～12月31日)	40
寄りそう視点	42
岩宮先生とのご縁に感謝して	46
〈うつ病診療セミナー〉徳永雄一郎氏	47
〈寄稿〉来住由樹氏	48
〈寄稿〉渡邊忠義氏	49
日常をとり戻す!	50
病院復旧の現場にて	52
第4期 2020年に向けて	53
タイムライン第4期(2017年1月1日～)	54
被災時に役立ったもの	55
病院内外の復旧過程	56
益城病院座談会「今日まで、そして明日から」	60
穏やかな時間を呼び戻すために	65
感謝と御礼	68
資料	70

第1期

ドキュメント3日間

4月14日~4月16日



2016年4月14日21時26分
 熊本県熊本地方を震央とする
 マグニチュード6.5の地震が発生。
 これは熊本地震の前震であり
 熊本県益城町で震度7を観測した。



熊本地震の概要

熊本県熊本地方を震央とした熊本地震は、2016年4月14日のM6.5の前震に4月16日のM7.3の本震が続発するという国内の災害史上初めての事態となり、被害が最も大きかった益城地区では震度7が2回観測された。以後、熊本地方、大分県中部等にかけて広い範囲で地震活動が活発となり、2017年4月30日までの震度1以上の地震回数は4,309回となった。熊本地震は日奈久断層帯、布田川断層帯の活動により、震源の深さ約10kmの比較的浅い場所で生じ、横ずれ断層等を震源断層とする内陸地殻内地震である。益城町では、非常に強い長周期地震動を観測し、地表に水平方向に約2m食い違っている断層のずれが現れ、地面や道路などの隆起陥没、家屋や擁壁倒壊、建物杭基礎破断などの被害が発生した。2017年4月18日時点の熊本地震直接死者数は50名、関連死者数は170名、負傷者は2,753名、避難者は183,882名。住宅被害は189,700棟（うち全壊8,642棟、半壊33,656棟）となっている。

【参考】

- ・国土交通省 気象庁 地震調査研究推進本部地震調査委員会『平成28年(2016年)熊本地震の評価(平成28年5月13日公表)』
- ・熊本県危機管理防災課『熊本地震等に係る被害状況について』【第72報】【第235報】

タイムライン 第1期 (地震発生～入院患者全員退去)

4月14日(木)	21:26	<p>前震発生(震度7 / M6.5)</p> <p>院内停電。通信不通となる。</p> <p>他病棟の状況わからず院長3病棟へ、非常電源下で安否確認。</p> <p>患者の状況→軽傷者が3名、痙攣発作1名。</p> <p>調理室・食堂付近より白い煙(恐らくコンクリートの粉塵)が立ちこめる。</p> <p>ガス漏れ発生。停電。</p> <p>1病棟デイルームへ患者を避難誘導。歩ける患者は自力歩行、介助を要する患者は男性スタッフが抱え、または背負って階段を下りる。</p> <p>入院患者・職員安否確認実施。</p> <p>準夜、深夜勤務者及び当直医で対応。</p> <p>グループホーム「ふるさと」も停電。電話不通。入居者17名に外傷無し。</p>
	22:10	<p>橘病棟1F災害対策本部設置。</p> <p>犬飼理事長・松永院長陣頭指揮のもと本部設置。</p> <p>看護部は夜勤責任者をリーダーとする。</p> <p>1階天井から訓練室内へ水漏れ。床に布団を敷き対応。</p> <p>救急避難バッグ、ヘルメット、照明等を確保し、各自着装</p> <p>栄養科は、スタッフ数名で管理棟3階から非常食の取り出し。</p> <p>(1日分を橘病棟の1階へ)</p>
	22:50	<p>緊急連絡一斉メールを全職員へ通知。</p> <p>「こちらは益城病院緊急連絡網メールシステムからの連絡です。</p> <p>夜勤スタッフ、患者さん共に無事です。建物内部外部は損傷が激しい状況です。</p> <p>橘病棟一階を災害本部(仮)として、理事長、院長が陣頭指揮に当たっています。</p> <p>入院患者さんの避難誘導しております。院外にいる職員は、病院に来れる方はお願いします。難しい場合は無理はせず、自宅待機にて、お願いします。」</p> <p>福祉ホーム「iハウス」等20名の施設入寮者全員を橘病棟1階に誘導する。</p>
15日(金)	23:28	<p>「入院継続困難」の判断により、「明日転院措置」の連絡をLINEにて理事長より県へ第一報。</p>
	5:00	<p>夜勤者を除き職員は一旦帰宅。</p> <p>入院患者199名の緊急避難措置(転院・退院)の方針通達。</p> <p>ライフライン途絶により入院機能喪失</p> <p>転院・退院に向けて持参薬の準備。</p> <p>12名出勤。栄養科は非常食や冷蔵庫の材料を使用して朝食の準備を開始。</p>
	5:30	<p>特養「花へんろ」は、入居者45名、ショートステイ11名に加え、「コスモ」の入居者15名、一般住民60名の避難所となった。</p>
	8:00	<p>入院患者・寮の避難者に朝食提供。職員へもおにぎりの提供。</p> <p>グループホーム「ふるさと」へは、各職員の食事を持ちより朝食の提供をする。</p> <p>NHK、フジテレビ(マスコミ第1陣)来院、中継開始。</p>
	8:30	<p>全出勤者を本部に招集。今後の対応について指示。</p> <p>災害対策本部のスタッフは、職種・所属を記入したベスト着用。</p> <p>当院DPAT研修修了者3名のノウハウを活用。</p> <p>ホワイトボードなどを利用し連絡先・状況把握。</p> <p>経時記録開始。入院患者の退転院先振り分け開始。</p>
	10:00	<p>グループホーム「ふるさと」の入居者の安否報告を全家族へ行う。</p>

4月16日(土)	10:00	自宅などへの退院開始。
	10:30	患者約50名の退院先未確定のため、益城町災害対策本部へ理事長が支援要請に出向く。
	11:00頃	入院患者の転院開始。 「阿蘇やまなみ病院」からの迎え。その後次々と転院先が決まっていく。 ①家族への連絡 ②転院先の決定 ③診療情報提供書作成 ④熊本県・熊本県精神科協会へ協力要請。 ※県内病院・施設から受け入れ申し出多数あり。
		DMAT、DPAT、警察、消防、自衛隊、報道各社集結。 電子カルテシステム使用不能のため、カルテ補助簿により患者の申し送り書類作成。
	12:00	入院患者・寮の避難者の昼食提供。職員にもおにぎりなどの提供。 グループホーム「ふるさと」は、電気・ガスが復旧し片付けの整理開始。 入居者の昼食は、スタッフの自宅にて準備提供。
	15:00	益城病院電気復旧。
	16:00	「真和館」よりおにぎりの炊き出し。 転院先を確保できなかった患者43名、県の指示により「県立こころの医療センター」体育館へ避難。(寝具・食料持参) 県の要請により、「県立こころの医療センター」へ当院のスタッフが応援に出向く。 (15日日勤2名、準夜勤2名・16日深夜勤2名、日勤3名)
	17:00	栄養科より寮の避難者、職員へおにぎり・カレーなど提供。 「ふるさと」の電気・ガス復旧に伴い、夕食は「ふるさと」で準備。
	20:00	最後の4名、受入先施設より迎えあり、入院患者199名全員の転出を完了。 (転院110名、避難所39名・退院50名)
	21:30	当直医・夜勤者を除き職員全員帰宅。
	1:25	本震発生(震度7 / M7.3) 「iハウス」の入居者20名は特養「花へんろ」へ移動。
	8:00	「ふるさと」も全てのライフラインを喪失し孤立。 朝食は前日より準備していた備蓄品等で提供。
	11:00	病棟の建物、損壊が激しく余震継続。 非常電源装置起動の指示あるも、本館屋上への通路が危険で給油ができない状態。 全てのライフライン喪失と判断。 緊急対策会議により特養「花へんろ」へ災害対策本部の移転を決定。
	12:00	自衛隊による給水活動。 各公的機関、医療機関、施設等との情報交換、情報収集。 「ふるさと」は、発電機での炊飯により食事の提供。
16:00	「花へんろ」へ本部移設完了。以後、病院敷地内は閉鎖。 「県立こころの医療センター」へ避難した患者は16日から18日にかけて継続的に全員転院となる。	



刻一刻と激しく状況が変化し、機転と決断力が求められる。
 しかし、非情にも想定の遙か上をいく熊本地震に、
 誰もが虚を突かれ、緊張と不安に驚愕みにされていた。

①



②



③



④



⑤



⑥

①急性期治療棟玄関前通路 ②地盤沈下による段差 ③1病棟(本館1階)で避難中の患者 ④医療情報室 ⑤外来精算カウンター ⑥薬局



⑦管理棟2階図書室 ⑧第1医局 ⑨急性期治療棟2階ナースステーション ⑩外来受付の給茶器破損状況 ⑪デイケア棟2階診療情報管理室 ⑫外来処置室 ⑬サーバー室 ⑭倒壊した第1駐車場擁壁 ⑮14日深夜のLINE画面（理事長から県庁宛） ⑯診療棟2階図書室



変わり果てた病院の姿。この後、さらにマグニチュード7.3の本震が益城町を襲うことになるとは、誰一人予測しなかった。

①



②



③



④



⑤



⑥

①グループホーム「ふるさと」1階に避難した入居者 ②倒れた事務所の書棚 ③グループホーム「ふるさと」裏側 ④健味健康園レストラン「大河」のフロア
⑤健味健康園レストラン「大河」の厨房 ⑥本館東側の院内路面



⑦擁壁の一部が損壊した第1駐車場 ⑧壁面が剥がれ崩れ落ちた管理棟内の階段 ⑨病室 ⑩病院西側の境界線 ⑪管理棟と診療棟をつなぐ通路の激しい地盤沈下
⑫急性期治療病棟玄関前の地盤沈下 ⑬病棟本館と急性期治療病棟の渡り廊下断裂 ⑭病棟本館と管理棟通路の断裂 ⑮事務局噴水側通路ブロックの破壊 ⑯病棟
本館と急性期治療病棟の渡り廊下断裂 ⑰管理棟から診療棟への通路破断



4月14日、前震により病棟フロアに避難した入院患者

4月14日午後9時半頃 地震が来ました

院長 松永 哲夫

その時、私は院長室にいました。「そろそろ帰ろ
うかな」と考えていたら、いきなり「ドッカーン」と
いう爆発音。椅子から30cmくらい飛び上がりました。
決して自分で飛び上がった訳ではなく、椅子ごと
宙に飛ばされた感じでした。鼻の奥がツーンと痛
くなるような衝撃で、一瞬のうちにテーブルがユラ
ユラと泳ぎ出し、テレビがガッシャンと落下し、書
棚がガリガリッと崩れて、中の本やファイルがドド
ドドとなだれ落ちてきて、初めは「爆撃？ミサイ
ル攻撃？」と思いました。やがて左右に揺れ始めて、
ようやく地震とわかりました。映画を見ているよう
な奇妙な現実感の中で、病棟に向かいました。

薄暗い病棟を回って患者さん達がみんな無事な
のに安心しました。スタッフも気丈に働いていまし
た。その日が初当直という森枝医師も(当直室は全



壊状態でしたが)、運良く病棟を回っていて難を逃
れていました。ヴァンティアン(食堂)には霧のよう
に白塵が舞い、厨房にはガスの臭いが漂い、爆発や
火事といった二次災害の恐怖を感じました。「外が
安全だ」と主張する患者さんもいましたが、近所の
塀が崩れて死者も出たと聞き、外が安全とも思えま
せんでした。薄暗い中、余震の度に「キャ～」と声
を上げる患者さん達に「だいじょうぶ、本震より大き
い余震は来ないと言うから」と、なだめていました。
約30時間後、もっと大きい本震が来ましたが、幸い
にもその時点では、患者さん達はみんな安全な場所
に移ることができていました。振り返ってみれば、
運が良かったなと思えることも、結構、多かったで
すよね。



倒れたCT（コンピュータ断層撮影）の機械

まさか、その日に地震が…

医師 渡邊 鮎子

4月14日の地震発生日の昼間、他院への病院見学の予定があり、私も同行させてもらっていました。その道中に、益城町には断層があるということを当院の職員からたまたま教えてもらい、「地震に備えておかないと」などと話しつつ、まさかその日に地震が起こるなどとは考えてもいませんでした。熊本地震は、自分の想像を大きく上回るものでした。

前震発生後に病院に来ると、橘病棟1Fに災害対策本部が設置されており、狭い空間にたくさんの職員がいました。このような非常事態を経験したことはなく、何をして良いのかわからずにはいましたが、まずベストが手渡され、自分の所属や名前を記入しました。全ての患者さんの転院もしくは退院という方針となり、診療情報提供書の作成を開始しました。電子カルテが停電で使用できず、最近の詳しい状態までは書けませんでしたので、記憶を辿りなが

らわかる範囲で作成していきました。その合間に、自宅退院される患者さんの家族に会ってお話をしました。

仮設トイレ設置もまだ不十分で、できるだけトイレに行かないように水分を控えて作業を行っていたのを覚えています。入院患者さんの転院などの目処がつき、帰る前にもらった手作りのおにぎりがすごく美味しく、災害直後にこのような差し入れをしていただいたことにとても驚きました。

本震後、しばらくは「花へんろ」で外来診療を行い、病院に戻った後も水が出ないなど不便さがありましたが、少しずつ病院は復旧していきました。今ではほとんどこれまで通りに診療できるようになってきており、人間の力のすごさを感じていません。



4月15日、橘病棟1Fに災害対策本部を設置

被災直後の混乱の中で

事務部事務次長 **宮崎 翔**

前震発生時、私は事務所でひとり仕事をしていました。そろそろ帰ろうとした時、ゆっくりと横揺れが始まりました。このまま収まるだろうと思った瞬間、一気に揺れが激しくなりました。窓ガラスが割れる音がして真っ暗になり、非常用照明が点灯すると、薄暗い事務所には全ての物が散乱し、建具は倒壊していました。非常ベルが鳴り響き尋常ではない状況に、まるで自分が取り返しのつかない事をしたかのような錯覚に陥り、茫然自失となりました。頭の中で「どうしたらいい？何をすべき？？」自問自答を何度か繰り返した後、「患者さんと職員の安否



確認が優先かつ重要だ！」と考え、ヘルメットを装着して懐中電灯を持ち、各病棟を駆け回りました。大きな余震が続き外は救急車両やヘリコプターの音が鳴り止まない中、地下室から投光器を運び出しました。また、5分で終わるような緊急連絡メールの発信に30分もかかり、異様なほど汗が出て喉はカラカラ、極度のショックと緊張状態にあることがわかりました。それは、予想だにしない怒濤の病院復旧・復興作業がこれから始まろうとする瞬間でした。



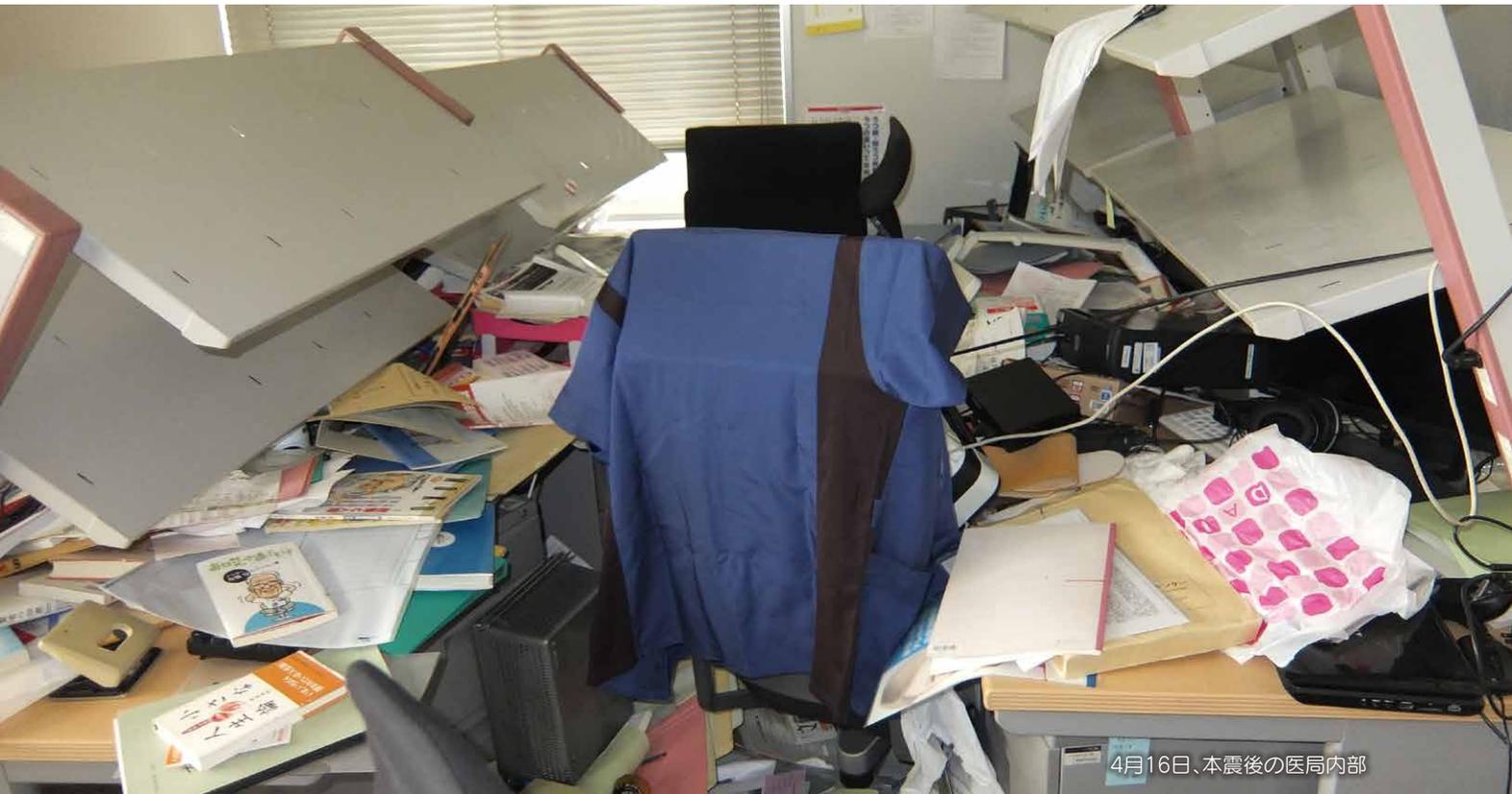
4月15日早朝、栄養科が炊き出しを実施

激しい余震の中で非常食を確保！

栄養管理科科长 井上 さとみ

4月14日に発生した熊本地震の前震で、厨房は使えなくなりました。ひっきりなしに来る強い余震の中で、「明日の朝食を何とかしなくては」と、非常食が備蓄されている管理棟の3階へ向かった時の恐怖は今も忘れられません。壁や天井が崩れ落ちた階段を上り、わずかな明かりを手がかりにドアをこじ開け、やっと1日分の食糧を確保しました。スタッフに片っ端から連絡し、5時に集合してもらいました。集まった6、7人で給水槽に残った水を大鍋やバケツに溜め、ガスボンベを集めて、どうにか翌日の3度の食事を賄いました。そして、クタクタに疲れて帰

宅した16日未明に、さらなる激震。それから厨房が使えるようになるまで2か月かかりました。毎日、ただ必死で食糧を調達しました。病院には、患者さんと職員だけでなく地域の人も多く身を寄せておられ、みんなが途方に暮れていました。先が見えず不安な中、食べることは何より大事な心の支え。そんな信念に突き動かされるように、炊き出しや支援物資の仕分けに没頭しながら、栄養科のスタッフ全員で支え合い、ただ一日一日を乗り越えていたように思います。



4月16日、本震後の医局内部

当直の夜を襲った本震

医師 森岡 由紀

4月15日は研修医と交代し、当日、病院の片付けの手伝いに来ていた医大生の次男と私が当直を担当することとなりました。患者さんはすでに全員転出していましたので、病院内にいたのは榮永主任と3人だけ。4月16日1時過ぎの本震時には、私と次男は当直室にいました。

ちょうど目が覚めてベッドに腰掛けていた時、突然大きな揺れが襲いました。床がまるで生き物のようにのたうち回り、あらゆる方向に揺さぶられたように思います。まるで箱に入れられ、シャッフルされたネズミの気分でした。当直室には背の高い家具がないのが幸いでしたが、パソコン、電気スタンド、時計などの物品は何度も何度も跳ねていました。建物自体が崩れてくるような恐怖は感じませんでした。30秒以上続いたのでしょうか？揺れがおさまっても、床に座ったまま次男と私は動けませんでした。その後も大きな揺れが続きました。

当直の榮永主任より電話があり、「橘病棟は室内にいないのが危ない気がする、外に出ましょう」との

ことでした。あんふあんビルの前の駐車場で、会長ご一家と一緒に声を掛け合いながら一夜を過ごしました。その時、助けられたのが非常用のリュックでした。かなり冷えたのでアルミのシートで身を包み、手回しラジオでニュースを聞き、非常用のろうそくで明かりを採り、水分補給もできました。

関連施設の職員も数名来られ、榮永主任、次男とともにリュックや水などの非常用物品の運搬をしました。職員が手分けして、寮の患者さんの安否確認もしていました。明け方近くになり、更に冷えましたので会長の体調を考慮し、揺れはあるものの橘病棟一階に避難しました。患者のMさんも一緒に過ごしました。

夜が明けてみると、益城病院内の風景は15日の夕方に見たものと大きく変わり、地面は激しくうねり、地盤も場所によっては1m以上と大きく陥没し、水道管、排水管の露出が見られ、改めて地震の激しさを実感した次第です。



4月16日の本震で、「ふるさと」も全てのライフラインを喪失

一丸となって守った「ふるさと」

高齢者 グループホーム「ふるさと」施設長 **坂田 京子**

「ふるさと」も熊本地震では、かなりの影響を受けました。建物の損傷は軽度でしたが、建具や家財は倒れて建物内は破損物が散乱する状況でした。しかし、人的被害が無かったのが本当に有り難いことです。入職半年の職員が夜勤中に前震に遭遇しましたが、毎月実施している避難訓練のおかげで、入所者全員を安全な食堂へスムーズに誘導できていました。また、「ふるさと」手作りの防災ずきんを着用して身の安全が守れたのも幸いでした。行事で使用するタッチライトを多数保有していたことで、停電時にも有効に活用できました。

ライフラインでは、6日目で電気とガスは復旧し

ましたが、水に関しては20日間の断水。被災の翌朝からの食事準備もできない中、それぞれの職員が自宅から食料を持ち寄って、職員宅で調理したり、発電機を使って炊飯。また、緊急避難物品の水や保存食を活用することで、配食までの数日間は1食も欠かさずに食事を提供することができました。入居者のご家族の家も殆どが町内で、大きな被害を受けておられたため、私たちは入居者を守る思いをさらに強くし、不安や混乱を招かないよう入居者に寄り添い、スタッフ間で支え合って「ふるさと」を守ることができました。

病院機能停止と 199名の大移動

看護部長 水田 由紀



熊本地震の前震は益城病院を大きく揺らし、ライフラインを寸断しました。本館1、2、3階の患者さんと職員は1階に避難し、橘病棟の患者さんは2階へ、福祉ホームの入居者は橘病棟の1階に避難して、繰り返される余震に肩を寄せ合って一夜を明かしました。

本館の患者さんたちが避難した1階デイルームは、天井からの水漏れが止まらず、濡れた布団の上を認知症の患者さんが徘徊するなど危ない状況でした。幸い応援の職員も駆けつけ、水漏れの影響がない廊下に病棟ごとに集まってもらい、病状観察、水分補給、保温などを行いました。朝方の冷えに備えて、各病棟からジャンパーや布団などを持ち寄り、朝の薬も準備しました。一番苦労したのは、上下水道が使用できない中での患者さんのトイレでした。ゴム手袋で排泄物を取り出し、次の患者さんが使用できるようにしたと聞きました。朝までの時間の経過は、あまり覚えていません。が、空が白み始めた頃、患者さんを全員転出させることが決まり、内服薬の準備のために、スタッフルームに散乱した棚やガラスを踏み越えて薬配車にたどり着き、1人分ずつビニール袋に詰める作業をしました。

被災状況の説明と退院の打診を各所属長から家族に行ったのですが、ご家族も被災されており時間を要しました。最終的に、50名の退院受け入れがありました。149名の転院先に情報提供書と処方箋を携行させることが決まり、カルテに代わる補助

簿も病棟から集めて追加しました。電子カルテが使えなくなったため情報提供書はすべて手書きでした。本部に看護部とPSWが集まり、受け入れ病院の情報が入るたびにホワイトボードに書き出し、どの患者さんをお願いするか病棟から提案して貰いました。

10時半頃には、第一陣の「阿蘇やまなみ病院」からの迎えが来ました。患者さんは着の身着のまま、転院先のスタッフへ口頭で申し送りをしました。自分の名前が言えない患者さんは腕にフルネームを書いたガムテープを貼らせていただいた方もいました。

転院患者と退院患者、迎えのご家族などが橘病棟1階出入り口に集中して混雑しながらも順調に進んでいるように思いましたが、途中から、受け入れ先の情報が錯綜して混乱をきたしはじめました。

午後に入り、「県立こころの医療センター」が40名を受け入れてくれるとの情報が入りましたが、避難所としての場所提供であったため、付き添い職員の手配をしました。迎えのマイクロバスに、患者さん、リネン類、食料品、災害バッグなどを乗せて送り出しました。外部の支援隊が同行してくれたのを憶えています。そして、ようやく20時頃に、入院患者199名の退院と転院が終了し、長い一日が終わりました。患者さんの受け入れに関しては沢山の病院に御協力いただき本当に感謝しています。



15日朝から他県のDPAT、警察、自衛隊などが来院



本部にてDPATと打ち合わせをする理事長と院長



患者情報をホワイトボードなどに記録して共有



「県立こころの医療センター」避難所へ向かうバス



避難する患者のため寝具を準備する様子



倒壊したバラ園の噴水

第2期

本部機能を担った「花へんろ」

4月17日~4月28日

タイムライン 第2期（特養「花へんろ」へ本部移転）

4月17日(日)	11:00	<p>対策会議実施。</p> <p>熊本県医療政策課を通じて、給水支援要請。</p> <p>自衛隊による給水活動。DMAT、DPAT、ボランティア、支援物資、炊き出し等の外部支援受入。(以後継続)</p> <p>県内外病院より自家発電装置の支援が届く。</p> <p>病院復旧グループ、院内感染対策グループ、受付対応グループ、物資管理グループ、病院入口保安要員等の担当を職員で割り振る。</p> <p>電子カルテシステム仮復旧。</p>
18日(月)	9:00	朝の全体会を開始。
	10:00	<p>「花へんろ」の事務所にて臨時外来診療開始。(再診のみ)</p> <p>職員安否確認・被災状況確認作業実施。</p> <p>病院敷地内に仮設トイレ5基設置。</p> <p>病院夜間警備開始。(県警協力)</p> <p>病院復旧グループにて病院内片付けなどの開始。</p> <p>テレビ局、新聞社等の取材対応。(以後継続)</p> <p>関係医療機関や企業、公的機関等より災害見舞い対応。(以後継続)</p>
20日(水)		訪問看護開始。
21日(木)		<p>職員向け情報共有専用インターネット掲示板設置。</p> <p>スローガン決定：①自分自身(職員・家族)を守る ②患者さんを守る</p> <p>益城病院復興ロードマップ策定。</p> <p>5月15日の入院機能復旧、8月1日の全病院機能回復を目指す。</p> <p>建物構造診断の安全確認作業実施により使用上問題なしの判定を得る。</p>
22日(金)		<p>子ども心療外来開始。(特養花へんろ静養室を利用)</p> <p>家屋倒壊職員への避難受入開始。(病院内施設を避難所として利用)</p>
23日(土)		育児室受入開始。
24日(日)		<p>(株)東西警備保障の協力で病院夜警体制強化。</p> <p>朝・夕の全体会で「がんばろう熊本！がんばろう益城！」の唱和開始。</p>
25日(月)	13:00	<p>厚生労働省2名で被害状況の把握に来院、DPAT支援のあり方、大学病院チームの支援申し出について意見交換。</p> <p>職員家族の小学生・中学生を預かる臨時ましき塾開講。</p> <p>(橘病棟リラクゼーションルームにて)</p>
27日(水)		<p>近隣住民の災害状況について聞き取り及び挨拶廻り。</p> <p>病院内電気仮復旧。</p> <p>認知症デイケア再開</p> <p>(株)ほっとキッチン(長崎県)の協力による給食提供支援の打合せ。</p>
28日(木)		<p>外来診療体制の整備。</p> <p>院内ネットワーク通信環境の動作確認で異常なし。</p> <p>明日29日に益城病院へ災害対策本部復帰を決定。</p>



4月17日本震後は災害対策本部を花へんろへ移設

応急外来、避難所、本部機能を担った「花へんろ」

「花へんろ」施設長 浦橋 一秀

特養「花へんろ」は、4月16日の本震で停電・断水となり、ライフラインが停止しました。幸い入居者や職員に怪我はなく、建物本体も殆ど被害はありませんでした。早速デイサービスを閉鎖し、避難所を開設。避難者も110名を超え、入居者もオーバーという大変な状況となりましたが、やがて支援物資もたくさん届くようになり、勤務変更やボランティアの皆様のおかげでマンパワーも確保でき、何とか運営を継続できました。

一方、病院はライフライン寸断により入院患者全員の転出を余儀なくされたため、「花へんろ」に本部を移し、4月18日から外来診療を再開しました。「花へんろ」はライフラインが既に復旧しており、1階フロアは、避難者、益城病院職員、ボランティアの宿泊所等に開放しました。雑然とした中、当施設の事務系職員は廊下で仕事をしていました。

やがてデイサービスの再開に向け、4月28日には避難所を解消。翌29日には益城病院への本部移転と、少しずつ復旧が進みました。お陰様で「花へんろ」は、現在すっかり平常に戻り、今まで同様に福祉避難者の受け入れを継続しております。

これまでお世話になった日本介護福祉士会、全国老協のボランティアの皆様、その他ご支援・ご協力いただいた関係者の皆様、また、大変な状況にもかかわらず利用者のために黙々と業務に専念してくれた職員に対し、心より感謝申し上げますとともに、被災された皆様のすみやかな復旧と復興を祈念しております。



がんばろうコールを毎朝の朝礼で実施

花へんろ概要: 特別養護老人ホーム「花へんろ」は、入所50床、ショートステイ10床、デイサービス20名。社会医療法人ましき会(益城病院)を設立母体として、社会福祉法人ましき苑が運営する施設で、益城病院が長年培ってきた高齢者への看護、介護、リハビリ等の専門的なノウハウを提供。



臨時外来診療の開始

副院長 宮崎 知博

前震から3日目の4月17日に本部が特養「花へんろ」に移り、様々な問題に試行錯誤の毎日が動き出しました。その一つに外来再開がありました。従来からの外来患者さんと転院以外の患者さんをどうやって支え診ていくか、考える時間はありませんでした。

精神科も、受診や薬の中断で悪化・再燃する事がしばしばあり、18日には外来を再開しました。しかし、個別の診察室確保は無理で、「花へんろ」の玄関を入れて右手にある受付、事務部門の一角に3つの机を配置し、その間にはきちんとした仕切りもなく奥は事務がそのまま見える、プライバシーも無いと同然の診察風景となったのです。

患者さんには迷惑をおかけしたと思いますが、幸いにも苦情や不満の声はほとんどなく、逆に多くの方が医師をねぎらってくださいました。外来は理事長・院長を除いた9名で分担しました。主治医が診るという余裕はなく、とにかく受診に来られた方を、手が空いた医師が次々に呼び込んで診察していくという状況でした。当初、薬の在庫や調剤薬局はいつ開くかなど心配しましたが、連携がうまくいきました。

担当時間から外れた医師は、医局の倒れた備品片付けなどに交代であたって、本来の診察再開に備えていきました。そうして連休明けの5月9日から、病院での通常外来が再開されました。





感染対策チームの活動

看護師 小田 泰徳

本震発生後、特養「花へんろ」の一室を借りて対策本部が設置されました。ここは、地域の避難所となっており、ピーク時は幼児から高齢者まで114名が避難していました。被災者でもある私たちは、震災当初、疲労感と混乱、また状況を変えられない自分たちにとっても無力感を覚えました。しかし、支援物資を運び、復興作業に尽力している方々の姿を見て勇気づけられ、避難所での感染防止対策への思いが強くなりました。

感染対策チームを組み、手洗い場所の確保、手指消毒薬の設置、トイレ清掃、手すりや床の消毒と役割分担し実施。活動中に声を掛け合う中で、優しさや労いの言葉が行き交い、凍った心が溶け始めるようで、少しでも人の役に立っている感覚を無性に嬉しく思いました。外来診療が始まると高齢者や車椅子の往来も多くなり、消毒液を浸した消毒エリアを

設けるなど、その対応に柔軟な工夫を施しました。

4月29日、本部の病院移転に伴い、感染者を発生することなく避難所での役割を終えましたが、感染対策チームの活動は、入院・外来診療が再開した病院でも継続しました。

避難所や院内での集団感染の発生がなかったことは、チームの熱意と協力体制が十分機能した結果だと思っています。震災当初感じた無力さを受け入れ、無力なりに「人の為に自分に何が出来るか」を考えて実践した一つ一つの経験が、スタッフの心の回復にもつながったことを感じました。





職員の仮避難所と 育児施設を院内に確保

育児室「あんふあん」 倉岡 英代

本震により家屋が倒壊した職員も多く、病院まで来られない職員の中には車中泊して当座を凌いだ職員もいました。雨露をしのげる場所だけでも、と患者さんがいなくなった病棟や在宅施設を開放し、一時的な住まいとして提供しました。ベッドと寝具だけではありましたが、眠ることと暖をとることができたようです。

また、本震から約1週間後、院内保育施設「あんふあん」を再開、さらに、小中学校休校により院内学童保育「臨時ましき塾」を開講し、職員の子どもの預かりを実施しました。まだライフライン復旧もおぼつかない状況の中、多くの支援物資と職員の協力のおかげで早期に開講することができました。熊本市東区の学習塾「なるほどゼミナール」から小中学生の教材を無償提供いただき、さらに、関西の小学校・中学校の教諭、熊本大学教育学部の学生がボランティアで講師をしてくださるなど、人的支援により充実した学童保育を行うことができました。





倒壊した我が家

支援者であり 被災者でもある私たち

私の自宅は、職場から徒歩で5分圏内にあります。4月14日の前震直後、停電で真っ暗な中、家中に散乱した家財を乗り越え、やっとの思いで外に出ました。スタッフや患者さんの安否が気になり、その足で病棟へと向かいました。そこには、混乱する患者さんへ必死に声かけをしているスタッフの姿がありました。この夜は、患者さんやスタッフの安全を確保することだけを考えて動き、翌15日は、入院患者さんの退院や転出の対応に追われました。全ての方を送り出して一息ついた日の深夜に再び熊本を地震が襲い、2週間もの間、車中泊をすることになるとはこの時は想像もしていませんでした。

17日に「花へんろ」に本部が設置されました。最初の仕事は患者さんやスタッフの安否と罹災状況の確認作業でした。携帯も繋がりにくい中、やっとスタッフと連絡が取れ無事な姿を見ることができた時、ホッと胸をなで下ろしたのを今でも鮮明に覚えていています。

入院機能が未だ回復しない中でできる事として、

副看護部長
兼 橋病棟 急性期治療病棟長 **金子 元子**

連携室室長、外来主任と共に患者さんの自宅や避難所への訪問看護の調整をしました。顔馴染みのスタッフが訪問することで、被災後の不安な事を話せたり、少しでも笑顔を取り戻して貰う力になりたいと支援を継続しました。

日中の仕事が終わると、夜は自立支援施設の入所者さん達と話をして過ごしました。本震の中を一緒に避難した事で信頼関係ができ、ただ同じ時間を過ごし、他愛もない話をするだけでしたが、互いに明日への力を貰っていたように思います。この時期は、自宅の損害を考えるより、自身がしなければならないことに無心に取り組んでいたように思います。

その一方で、職場を離れると、地震で変わり果てた町並みを見るだけで涙が溢れて止まらない私がありました。支援者でありながら被災者でもある私達は、全国の皆さんに物質的にも人的にも支援をしていただく中で、支援者として働くための大きな力を貰っていたように思います。

遠くは東北、そして全国から駆けつけたボランティア、県内外の精神科病院支援チームなど、支援の火を灯してくれた皆さんの温かい励ましに勇気づけられ、上を向くことができた。



①就労支援事業所「健味健食園」の復旧作業 ②管理棟復旧作業 ③LOVE&RESPECTからの支援物資 ④花へんろでの炊出し ⑤ダスキンボランティアによる清掃風景 ⑥あさかストレスケアセンターによる勉強会 ⑦ボランティアによるハンドマッサージ ⑧鶴田病院からの炊き出し ⑨ボランティアによる炊き出し ⑩あさかホスピタルからの支援職員 ⑪ボランティアの皆さん ⑫臨時ましき塾 ⑬熊本ホテルキャッスルの炊出し ⑭岡山県精神科医療センターからの支援職員



⑮ダスキンによる1病棟訓練室内清掃 ⑯九州キリスト災害支援センターの炊出し ⑰パン工房「まりも」職員による昼食時の販売 ⑱鶴田病院から炊き出し ⑲ダスキンによる病院エントランスの除草 ⑳九州キリスト災害支援センターの炊出し ㉑病院公用車の洗車支援 ㉒あさかホスピタルの支援チーム ㉓中華丼の炊出し ㉔ダスキンボランティアによる洗車 ㉕ダスキンボランティアによる病棟清掃 ㉖チーム岡山

災害派遣ボランティア

分類	日付	人数
益城町災害派遣ボランティア	2016年 4月22日～6月15日	280名
JR九州 ラグビー部	6月25日	20名
ダスキン九州エリア	7月	25名
音楽ボランティア	9月12日	3名
職員家族ボランティア		10名

炊き出し等ボランティア

分類	日付	回数
山口大介 様	4月26日～28日	3回
熊本ホテルキャッスル	4月27日	1回
鶴田病院	4月29日	1回
九州キリスト災害支援センター	5月7日～6月1日	4回
整体療術院 (マッサージ)	5月6日～5月10日	2回
ファンケル (マッサージ)		2回

この他にも多数のボランティアの方に長期間にわたり活動していただきました。

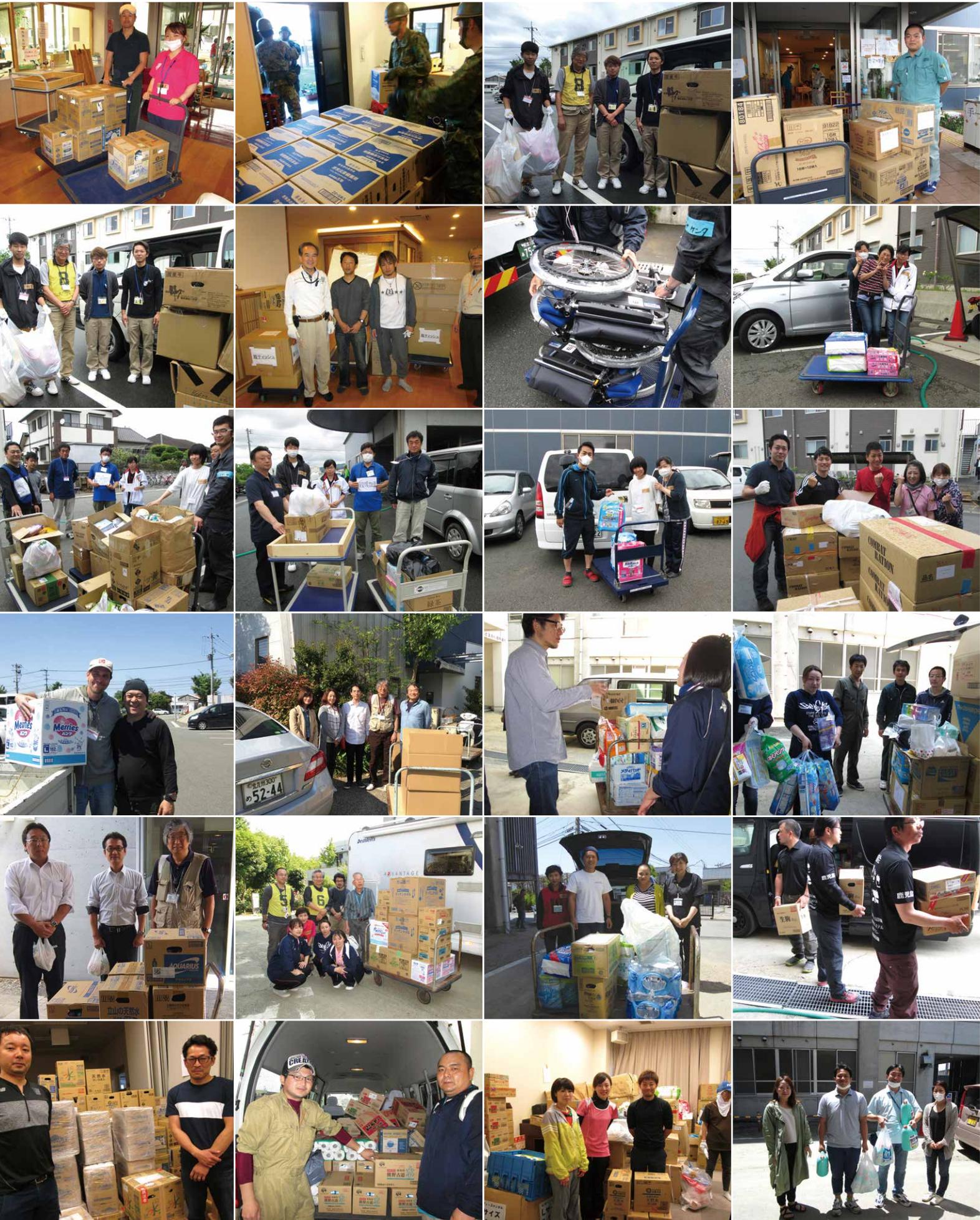


全国から、たくさんのご支援をいただきました。

①自衛隊からの給水支援 ②九州キリスト災害支援センターの皆さん



③志布志市から育児室へ慰問 ④日産プリンスのボランティア ⑤J2愛媛FCサポーターの皆さん ⑥ダスキンボランティア(1回目) ⑦JR九州ラグビー部の皆さん ⑧ボランティアの皆さん ⑨鹿児島「開進会」の皆さんと ⑩きよたひろこ(演歌歌謡曲ライブ)ボランティア ⑪鹿児島「開進会」の支援物資車両



被災直後からの記録を残すため、ご支援の皆様や支援物資の写真を撮らせていただきました。
撮影にご協力いただいた方々に深く感謝いたします。



熊本地震支援物資一覧

日付	企業・施設・ボランティア等からの支援	支援物資リスト
4月 15日	エーザイ 真和館 グループホームそよかぜ サンレイメディカル	お茶24本(500mlペットボトル) おにぎり多数、非常用水 ジュース2L×10本 身体清拭シート段ボール7箱
4月 16日	平成病院 ヴォルターズ 不知火病院	メイバランス、飲み物18本×5箱(補助食品)、自家発電機8台、ガソリン缶8缶 紙おむつ、軍手、電池、懐中電灯、レトルト食品など多数 自家発電機2台、ガソリン缶10缶、ドラムコード5個、ハンディライト、電池など多数
17日	株式会社ナリコマ	水2リットル46本、味噌汁160g×24×2箱、ポテトツナサラダ24×4箱、食品
18日	大塚製薬 淀川食品 吉野産産事務所(代表 吉野聡 様)	クリスタルガイザー 500ml×24本 10ケース、カロリーメイト30箱×10ケース お米、水、他材料 多大な支援
19日	全日本病院協会 済生会病院 NPO法人ウブドベ 山下医科器械熊本 熊本県庁 (沖縄県)田崎病院	半月どら焼き×10箱 水2L×27本 医療用品、食料品、日用品など多数 水2L×6本入り×20ケース 水1020×15本入り×5箱 食料品、水、懐中電灯ほか多数
20日	ASKUL 熊本県あかぬの里あかねワークセンター 桜ヶ丘病院 全日本病院協会 日本赤十字社	水2L×4本、クラフトテープ、ペーパータオル等 水20L×21個 多大な支援 レトルト食品多数 毛布60枚
21日	福岡大学サッカー部 全日本病院協会 ホームラン・システムズ エーザイ アステム 新生堂 (株)大塚製薬(馬場 様) 全日本病院協会 // ピースリーズ(ヤスジャパン) 全日本病院協会 (佐賀県) 鮫島先生 (宮城塩釜) 菅野康 様 (有)シャルレ ミズ	ブランケット7枚、トイレトーパー、お菓子等 医薬品多数 カップ麺4箱、ティスポ皿多数 チョコラBB2箱(段ボール)、リンスキン(手ふき)、清浄綿 おむつ3箱、タオル1箱 水2L×6本 OS-1(ジュース)2箱、(ゼリー)2箱 イオダイン10%綿棒1箱、0.05%ヘキサック水2本、ポリ袋45L1箱 半固形栄養食2箱、生菓子10箱 靴下多数、男女下着多数 水2L×6本×50箱 佐賀錦(和菓子)多数 水2L12本入り×10箱、カレーなど 男女下着、靴下多数
22日	済生会病院 //	医療用品多数、食器等 食料品、日用品多数
25日	松原病院 安田生命 明治安田生命	医療用品多数、他支援多数 水、カップ麺など多数 タオル1箱、軍手20双、簡易トイレ400回分
26日	日本セイフティ(株)	ラップボン(災害用簡易トイレ) 16台
27日	熊本ホテル 三菱電機 杏林製薬 (宮崎県) 国見が丘病院	携帯用ウエットティッシュ 30枚×3個入り8袋、他日用品多数 水2L6本×2箱、500ml×24本×2箱 モーラステープ7箱 クロックス、靴、サンダルなど計280足
28日	日本セイフティ(株) (宮崎県) 石母田 様 天草環境サービス 様	ラップボン(災害用簡易トイレ)・ラップボンキュート(1)・フィルムロール1箱・ポリマー2箱 タオル、ナプキン、ティッシュペーパー、シャンプー類など段ボール1箱 デコボン1箱
29日	朝倉病院(林 院長) 税理士法人SKC 堺俊治様 青磁野病院(全日本病院協会) きょうされん(神水病院 篠原 様) 赤松 様 きょうされん (大阪府) 七山病院 井上 様	段ボールトイレ10セット 手袋(軍手) 90双、スクールシューズ138足 水500ML×24本×21箱、8L×9個、医療用品、日用品多数 履くパンツ9箱、尿取りパット1箱、口腔ケアセット2箱、水2L×6本×20箱など多数 ラップボン災害用トイレ1台 履くパンツ、オムツ、ティッシュペーパー、消毒薬、タオル等多数 LEDネックライト300個、乾電池1ケース、各種食料品多数 水2L×6本×2箱、お茶525ML1ケース、ポカリ500×1ケース、果物1ケースなど多数
5月 3日	青磁野病院(全日本病院協会) LOHACO 熊本医師会、きょうされん たんぼぼ 神子結奈 様 くわみず病院 菊陽病院 かめおが製作所 きょうされん(共同作業所)	水8L×65箱、アルコールティッシュ7本、ブラ手6箱、鮎1袋(大袋)、ドライシャンプー2本 水20箱、簡易トイレ3個、非常用トイレ100回分×10箱 スーパーパーナシウム富士8L×37ケース、8L×29ケース 水2L×36ケース、水2L×12本 キッチンハイター 5L×3本、600ml×10本、1.5L×2本 大人用おむつ10袋、紙おむつテープ式20枚×4セット(M)、水多数 水2L×6本 10ケース 水2L×6本 12ケース お菓子類、さばみそ缶(24個入り×6箱)、レトルト食品、ナプキンなど多数
5日	熊本市医師会 たんぼぼ きょうされん	水8L×164箱 スプーン、箸、腕プレート皿、おわん 水2L×6本入り1箱、ウエットティッシュ、ティッシュペーパー、ハイター6本
6日	古家きみこ 様 池田 様 キリスト教会 木山ブース 九州プライマリーケア(藤井 様)	米2袋、水2L×6本×6ケース、ウエットタオル2箱、乾パン60食×3ケース 水2L×6本×8箱、子供用おもちゃ、歯ブラシセット1箱、除菌消臭スプレー 23本 ペットボトル多数、お菓子、水、各種ジュース多数、食料品、日用品多数 水500ML×4ケース、2L×6本2ケース、ジュースなど多数
7日	九州キリスト(災害支援センター) やまごこ福祉会(きょうされん)	ジュース、食料品多数、日用品多数、おもちゃ、水17箱 水2L×30本、キッチンハイター 102本

日付	企業・施設・ボランティア等からの支援	支援物資リスト
	くすのきクリニック	大人用おむつ6箱
5月 7日	イーザイ	水2L×6本×6箱、烏龍茶500ML×24本1箱、チョコラBB3箱、ティシュペーパーなど多数
	LOHACO	泡ハンドソープ20本×5箱、食器用洗剤250ML×2箱、簡易トイレ5枚×3箱、キッチンハイター 20本
	きょうされん	スポーツ飲料水多数、日用品多数
	九州キリスト災害支援センター	ボカリスエット500ML×24×4箱、青汁20箱、コーヒー、ジュースなど多数
	イーライリリー（野村 様）	ボールペン、メモ帳、3色ボールペン多数
	ハクソウ	身体拭きウエットタオルなど衛生材料
10日	あさかホスピタル	作業所手作りクッキー 2箱、ゆべし2箱
	（佐世保）霊友会	水2L×6×10箱、おこわ（アルファマ） 50袋×4箱、ウーロン茶2L×4本、スポーツ飲用2L×2本
	霊友会（九州支部）	ハイター多数、各種タオル多数
	きょうされん福岡支部	口腔ケアセット8本×8箱
	かしはらホーム（古賀施設長）	嘔吐物処理セット1×4入り1箱
	松原病院（佐々雄治 様）	支援多数
11日	九州ラーメン党	飲料水多数、日用品多数、お菓子多数
	浅香山病院	支援多数
	平成病院理事長（藤本敏雄先生）	饅頭30個入り×5箱
12日	菊陽病院	ペットボトル水2L×20本
	埼玉医大（丸木理事長）	手指消毒剤50本、マスク1箱
13日	アパレル福屋	ジャージ2箱、半ズボン1箱、上着2箱
	菊陽病院	缶詰多数、米多数、日用品多数、飲料水多数
	メットライフ生命保険会社	水500×25本×11箱、トイレトペーパー 8パック、タオル多数、タオルケット1枚
	霊友会	水2L×6本×50箱、オムツ3パック（大人用）
	カドカワ 様（歯科総合社）	紙コップ3000個×2箱、サンプル歯磨き粉（10個）×4箱、歯ブラシ25本
	嬉野温泉病院	お茶パック多数、各種お菓子多数、他支援多数
	上益城郡医師会	支援多数
15日	大阪明星学園（教職員一同）	水2L×6本×30箱、お菓子1箱
	RQ九州（五ヶ瀬ドームボランティアセンター）	体拭きシート1箱、タオル1箱、マルチポンチヨ 30枚、お茶の葉90個
16日	日本セーフティ（株）（湯谷 様）	ラップボン用ウエットティッシュ 5箱・凝固剤5箱・ラップフィルム4箱
	熊本トヨタ（坂田 様）	カップめん2箱、ウエットティッシュ多数、緊急対策用トイレ ペンリー袋20回セット×4箱
17日	熊本トヨタ（坂田 様）	ウエットティッシュ 30個×3箱、水500ml×24本×4箱、対策用トイレ20回セット3箱、簡易組み立て式1セット
	RQ九州（宮崎県五ヶ瀬ドーム）	水2L×6本入り×8箱、無洗米、レトルト食品、お菓子多数
	たいようの丘ホスピタル（原田俊樹院長）	最中2箱（多数）
18日	あおば病院	水2L×6本×8箱、アクエリアス500ml×24本×2箱
19日	RQ九州	弾圧ストックング62足、乳児用ミルク多数、菓子多数
	熊本トヨタ（坂田 様）	紙おむつ（テープ） M 4箱、新生児用おむつなど多数
	（沖縄県）西表島役場	安納いも80袋
	九州キリスト支援センター	ジュース240本
	（柏崎市）柏崎厚生病院院長（松田ひろし様）	フェイスタオル400枚
20日	九州ラーメン党	パン82個、他多数
23日	（石巻市）乳幼児保育園ミルク（相原かよみ様）	レトルト食品など多数
	ライオンハイジーン株式会社	ハンドソープ、手指消毒関係多量
	（福岡県）霊友会	医療用品、日用品多量
	熊本銀行	水2L×6本×8箱、大人用履くパンツなど多数
26日	RQ九州（西白杵郡五ヶ瀬町）	水2L6本入り×10箱、ウエットティッシュ 48個、お茶石鯨48個、フットバス3個
30日	東日本税理士会（長英一郎様）	サントリー南アルプス天然水500ml×24本×18ケース
6月 1日	水俣ダイビングサービス・水俣福音キリスト教会熊本いずみ教会	水1.5L×12本×8箱
	（川崎市）東芝トレーディング株式会社	水2L×6本×25箱、ほかほかセット15箱、お菓子多数
	（香川県）五色台病院（佐藤仁院長）	讃岐うどん多数
3日	野村証券株式会社（藤森智矢様）	水2L×6本×20箱
4日	RQ九州（市民災害救援センター 川上 様）	水2L×6本×8箱
5日	RQ九州（代表 杉田 様）	水2L×6本入り×12箱
7日	RQ九州	ウエットティッシュ（ボトル式） 56本+24本、掃除用タオル多数
9日	メディブレイン（多伊良 社長）	オロナミンC×4ケース
11日	熊本大学景観デザイン研究室 坂茂建築設計	紙管間仕切りセット×50セット
13日	たいようの丘ホスピタル（原田俊樹院長）	ゆべし（お菓子）多数
15日	（福岡市）越智須美子 様	チロリアン（お菓子） 10箱
	益城町役場	段ボールベッド50セット
21日	東町グラン歯科（本田壮一郎 院長）	歯ブラシ100本、義歯用歯ブラシデンタルポリス300本、歯磨き粉108本など口腔ケアに関する品多数
	RQ九州（代表 杉田 様）	水2L×6本×12箱、ウエットティッシュ・ウエット布巾30枚、石鹸、段ボールベッド1個
	（北海道）武田豊美 様	支援多数
	民医連 神水病院本部	包帯60本・紙判20箱・手指消毒ウエットティッシュ、ラテックス72本（包帯）
	CRC検査センター	水2L12本、水タンク5個、米10kg、18Lタンク4本、無洗米2kg など食料品多数
27日	（千葉県）計見一雄 先生	さくらんぼ2kg
29日	RQ九州	水2L×6本×25箱
	JAましき木山支店	紙おむつ類20箱（トラック1台）
	飯塚病院	義援金
7月 7日	益城中学校校長（松本 先生）	水2L×6本入り×9箱
13日	熊本赤十字病院感染認定看護師（東 様）	アルコール（手指消毒） 4箱、ポータブルトイレ用汚物用袋2箱、消毒用ウエットティッシュ 4箱
	//	嘔吐処理セット1箱・泡ハイター 1箱・
25日	ボランティアアイきます熊本（坂梨純也 様）	水2L×9本×22箱
	CRC検査センター	カップラーメン20個入り1箱
9月 13日	益城町役場	紙マスク（数種類）段ボール20箱、ナプキン（数種類）段ボール3箱
12月 23日	杉山優様	トラック1台分のおむつ関係多数、手指消毒、手洗い洗剤など多数

この他にも全国から多くのご支援をいただき、現在に至っています。
記録に残せなかったものも多数あり、深くお詫び申し上げます。

精神科病院機能と災害支援

理事長 犬飼 邦明

いまや精神科病院の機能は医療のみならず、高齢者介護、障害者福祉、精神保健領域まで広範囲に及んでいる。入院患者以外にも通院、在宅、地域移行者など、多くの患者や障害者が精神科病院を中心に生活しており、災害時には早期に精神科病院機能の回復を図らなければ、いわば二次災害につながるおそれがある。精神科災害支援を考えた場合、「医療機能の回復」とは「失われた精神科病院機能の回復」でもある。DMAT、DPATなどの公的医療支援の多くは初期の患者搬送が終われば病院を離れ、被災所巡りが主体となっているようで、いわば「身体モデル」「医療モデル」としての支援であり、しかも保険診療はできないという制約がある。また、多くのスタッフが被災した状況下では医療、介護の担い手が直ちに不足することになるが、「医療モデル」でその状況は想定されていない。われわれは医療専門職の集団ではあっても、大規模災害や危機管理の面では素人といってもよい。広汎な危機管理体制を組むのも容易ではない。

そういう意味からも、4月下旬からいち早く支援の申し出をいただいた岡山県精神科医療センター、岡山県精神科病院協会、あさかホスピタル、九州大学などのグループは、「長期滞在し病院の管理下に入っの支援」を明確に示され、2ヵ月にわたって医師のみならずコメディカルや事務職・介護職まで含んだ「精神科病院支援モデル」として機能した。また、早期から介護支援に入っていた日本介護福祉士会などの即断即応の活動は特筆に値する。

自院での経験を踏まえ、大規模災害時の精神科病院支援として以下のことを考えている。

- 1: 各精神科病院の機能を熟知していることから、被災直後より刻々と変化するそれらの障害状況を把握できる立場にあるのは各県精神科病院協会(日精協支部)であり、その役割は重要である。早期から県の災害対策本部(医療救護調整本部)の中で精神科災害医療コーディネーターとして加われば、よりスムーズな支援調整が可能になったのではないかと考える。
- 2: DMAT、JMATなどの災害医療支援チームは被災直後のトリアージによる救命救急処置と被災医療機関からの患者搬送が主眼であり、その後は避難所における医療支援に移る。しかし多くの精神科病院は入院患者以外にもさまざまな介護、福祉、保健活動の機能を有しており、これらが破綻した場合の二次災害も無視できない。よって、たとえば「JPAT」のような精神科機能面に着目した支援チームが必要であろう。支援スタッフには医療職に加え、PSW、CP、OTRなどのコ



メディカル、介護職なども含める必要があると思われる。

- 3: これらの多職種による精神科災害支援活動は中期以降の避難所や仮設住宅などの被災者に対しても、また行政職員や保健師などの災害業務に携わる方々の心のケアにも重要な役割を果たすものと思われる。そのためには縦割りの本部機能、指揮命令系統ではなく、現地における精神科災害医療コーディネーターの関与の下に配置されることで、より迅速かつ適切な対応が可能となろう。
- 4: 職員自身も被災者であり、やむなく転居、離職する者も少なくない。スタッフが減少するなかで、従来にはなかった避難所や仮設住宅における新たな精神科医療需要が予測され、訪問診療やアウトリーチを中心とした在宅医療への積極的関わりが必要とされる。

益城町も当面は人口流出が続くことが予想される。地域医療構想も根本から見直されることになるかもしれない。反面、避難所や仮設住宅で生活する7,000名ほどの住民は、被災経験や環境変化のなかでストレス性は高まる一方であろう。本来の災害精神科医療の活躍の時はこれからである。心のケアセンターや地域支え合いセンターの開設など、公的支援が計画されている。地域精神科病院として期待されることも多くなっている。期待に応じるには人材、マンパワーの確保が不可欠で、従来の事業の見直しや集約化が必然となる。まだまだ気の抜けない状況がつづく。

最後に、被災直後より全国各地の精神科医療関係者よりさまざまな物的、心的、人的なご支援をいただいた。また昼夜を分かたず災害対策本部や調整本部に詰め、各精神科病院や避難所等をこまめに回られた熊本県精神保健福祉センターの医師、DPATチームには心より感謝申し上げます。

第3期

病院機能再生へ

4月29日~12月31日

タイムライン 第3期 (4/29 ~ 12/31)

4月29日(金)	災害対策本部を益城病院1病棟へ移転。
5月 2日(月)	精神科デイケア再開。 長崎県のほっとキッチンより給食支援開始。 県外の精神科病院(岡山県精神科医療センター、あさかホスピタル、九州圏内大学病院精神科)から医療支援チーム来院。(長期支援へ)
9日(月)	職員のメンタルヘルスチェック開始。
10日(火)	外来診療再開。 橘病棟入院患者受入再開。 ドローンによる病院全景を空撮。 復旧のための建設打合せ。破損・故障箇所確認と修復作業開始。 益城病院と関連施設の罹災証明申請手続き。
13日(金)	全体会議開催。①6月15日の入院機能回復と転院患者受け入れを目指す。 ②その間の職員の休業取得を奨励。③在宅診療の強化。(訪問看護・訪問診療)
28日(土)	嬉野温泉病院、大阪浅香山病院より職員へ保養所利用の支援申し出
6月 1日(水)	嬉野温泉病院から見舞金と食品及びお茶など多数の支援物資届く。 在宅診療部門立ち上げ。 病棟本館給排水工事着工。 院内職員向け映画鑑賞会実施『世界最速のインディアン』。
6日(月)	橘病棟2F・3F・4F給排水復旧。
13日(月)	あさかホスピタル「心のケア」の講演。(講師 渡邊忠義氏) 臨時経営管理部会開催、以後定例会となる。
14日(火)	病棟本館2F・3F給排水復旧。
15日(水)	2病棟、3病棟入院患者(被災で転出した患者)受入開始。 2病棟を認知症治療、3病棟を精神療養病棟として稼働。 正面玄関、管理棟1Fフロア復旧工事着工。
21日(火)	臨時広報誌Reborn Vol.1発刊。
7月 6日(水)	転院先精神科病院へお礼の挨拶訪問開始(理事長・看護部長・事務次長)
17日(日)	嬉野温泉病院音楽療法士がボランティアで来院
25日(月)	益城病院学童保育「ましき塾」開講(8月19日まで)
28日(木)	正面入口・総合受付復旧。 益城病院FACEBOOK開設
8月12日(金)	嬉野温泉病院理事長と危機管理について打合せ
26日(金)	益城病院夏祭り(災害募金からの援助にて)
31日(水)	臨時広報誌Reborn Vol.2発刊。
9月 1日(木)	外来処方院内調剤開始。 全体会開始(理事長による今後の方針)以後定例となる。①病院機能一部移転も視野に入れた復興計画。②職員のメンタルヘルス実施。
8日(木)	嬉野温泉病院事務長、施設係による装備等の見学
29日(木)	熊本県中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業復興事業計画認定。
20日(火)	被災時の職員行動の聞き取りを行う
30日(金)	岡山県精神科医療センターへ訪問見学
10月 3日(月)	コスモス忌開催。(真教寺、真野住職)
7日(金)	第2外来診療棟解体開始。
15日(土)	第6回院内学会「熊本地震を語り継ぐ～それぞれの場所で～」実施。(12演題)
19日(水)	日本精神科病院協会山崎学会長が当院を慰問。
20日(木)	ドローンによる益城病院上空撮影。
11月14日(月)	全体会開催。①地震後7カ月の振り返り。②12月賞与確保。③Plan2020策定と益城病院復興計画。
12月15日(木)	病院行事食クリスマスバイキング実施。
17日(土)	院内道路舗装復旧工事。(12月26日工事完了)
20日(火)	鹿児島県の志布志市観光特産品協会より育児室「あひふあひ」へ慰問。 ゆるキャラが園児たちにクリスマスのプレゼント

支援者と被災者のはざままで悩みながらも、
一人ひとりが自分のなすべき事に真摯に取り組んだ。



全体会





より添う視点

認知症 デイケア

新人看護師として利用者へ寄り添う

認知症デイケア 看護師 森下 あずさ

私は益城病院に就職して3ヶ月後、熊本地震を経験しました。初めての精神科病院、しかも在宅部所属ということで、利用者とその家族の支援を行う在宅業務の面白さ、それに伴う難しさを感じながらも、心機一転頑張ろうと意気込んでいた矢先の出来事でした。

この2度の地震で、順調と思えた新生活は一変しました。通常業務ではない、臨機応変な対応が必要となる被災時の活動が始まりました。まずは安否確認。堀副長をはじめ先輩方が発する言葉かけは、利用者の特徴や問題点、居住空間や家族などの背景まできめ細かく把握したもので、私は感銘を受けました。親しい関係性がこの被災時にも生かされ、きっと連絡を受けた利用者や家族は、職員の声に、どんな薬にも勝る安堵感を感じたに違いありません。

そして、被災から2週間後、他の部署に先駆けて認知症デイケアを再開させる運びとなりました。水が出ない、トイレも流せない中、限られた資源を活用した感染対策と脱水予防について、経験年数や職種を問わず、それぞれが持っている知識を出し合い対策を行いました。デイケア活動中は笑顔で過ごしてもらい、地震のストレスを少しでも取り除きたいという思いを胸に、職員が同じ方向を向いて、利用者のために活動再開を果たすことができました。

この被災のため、本来ならば経験すべき新人教育を受けていない状態です。しかし、被災から学んだ事は大きく、今後は多面的な視野と柔軟性をもって、今回の学びを生かした支援を行っていきたいと思います。



より添う視点

在宅診療部
高齢者
支援チーム

「いきいきカフェ」による在宅支援

認知症ケア副長 堀 光代

昨年の熊本地震で被災した益城町は、地域の様子が一変。多くの方が仮設住宅に入られたため、地域のコミュニティも大きく変わりました。益城で開業している病院として、コミュニティ再生のために私達に何かお手伝いできる事はないかと検討を重ねました。そして、益城病院では、昨年9月から熊本県認知症サポーターによる見守り体制事業の補助金を受け、「オレンジサロン」の一環として在宅診療部の高齢者支援チームによるカフェ活動を、地域と連携しながら展開。院内では毎週火曜日、職員や通院患者さんが一緒にカフェを開いています。また、パン工房「まりも」とともに4カ所の仮設住宅を周り、市の後、下砥川、福富の3カ所では、被災地の公民館や民家の庭を借りて「いきいきカフェ」を運営しています。地域の人たちが、お茶やコーヒーを飲みながらおしゃべりをしたり大きな声で笑ったりと、日常を忘れ、楽しいひと時を過ごす場となっています。「久しぶりに会えた」「ゆっくり話せて楽しかった」といった喜びの声も聞かれます。

木山地域の市の後では、地震前に120軒以上あった家の殆どが全壊し、残ったのはわずか十数軒です。



ここに住んでいる人たちは、今も暗く寂しい夜を過ごしているといいます。被災からの復興は進んでいますが、被災者間の交流は乏しくなっているのが現実です。そんな中、社会から取り残され孤独に陥る人がいないよう寄り添うことが、このカフェの目的です。

私は熊本市在住ですが、地震の後、地域の方々と共に活動していくうちに「自分は益城町の人間だ」という思いが強くなりました。今後も積極的に病院から外に出て 地域のため力になれることを見つけ、少しでも被災地域の方々が元気になれるようお手伝いしていきたいと思っています。



熊本地震はとても怖い体験であり、時が過ぎ1年を迎えようとする今でもその感触が蘇ります。地震直後の切迫感、空回りしながら高揚感で乗り切ろうとしていた昨年の春、あの時を少しだけ冷静に振り返るこの頃です。

職員に「お話をききます」と声をかけたのは4月19日、朝の全体会でした。無事を確認し喜ぶ職員の中に涙を流す人達を見ました。支援物資の配布などまるで売店のおばちゃんとしていた心理士は、その一角で職員に声をかけ続けました。まずは物質的な支援が一番です。中でも被害の大きい職員には、優先的に食べ物を持ち帰ってもらいました。

5月に第1回職員アンケートを実施。希望者のみ(N=52名)にSQD*を行い、全体の4割程に食事や睡眠の問題、揺れに敏感、疲れやすいなどが目立ち

臨床心理士 チーム

より
添う
視点

スタッフ支援のための メンタルヘルス

臨床心理士主任 小松 哉子

ました。8月に第2回目を実施。全職員(N=230名)を対象に、SQD、IES-R**、簡易ストレス度チェックを行いました。経過とともに抑うつやイライラが増えていることが特徴的でした。結果を報告すると同時に、被災状況や家族の情報を踏まえ、ひとりひとりに一言メッセージを添え、職員に少しでも声が届くようにと願いました。

アンケートを実施するにあたり、岡山チームの希望ヶ丘ホスピタル病院長・引地充先生が、「今後僕たち岡山チームが継続してスタッフ支援の役割を担います」と頼もしい申し出をして下さいました。訪問診療に行く車中でさりげなく職員の話の聴いたり、職員の状態について、チーム交代の度に気にかけて頂きました。声をかけてもらう嬉しさ、相談できる安心感、自分を確かめできる安堵感など、職員へのメッセージとして還元させて頂きました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

年明け、別のアンケートでは「疲れている」「体調がすぐれない」という職員が多く、新たな取り組みが動き出しています。また春を迎える度に熊本地震を思い出す“記念日反応”が生じることも予想されます。被災者であり支援者である職員のメンタルヘルスは試行錯誤の日々ですが、これからも見守り、見守られながらじっくりと歩んでいきます。

*SQD (Screening Questionnaire for Disaster Mental Health) ところの健康問題に関するスクリーニング尺度
**IES-R (Impact of Event Scale-Revised) 改訂出来事インパクト尺度日本語版

より添う視点

薬局

薬局業務と
人とのつながり

薬局長 原 幸輔

2回の大地震により病院機能は完全にストップしましたが、診療の継続は不可欠であることから、直ちに「花へんろ」に仮診療所が開設され、患者さんの診察が開始されました。薬局としては、周辺の調剤薬局が調剤不能の中、処方に対応するため、施設長室を薬局に改装して調剤業務に備えました。散乱した病院薬局から主な医薬品をかき集めて対応を始めたのですが、分包機がないため、薬包紙の手包みを学生時代以来経験することになりました。すぐに知人から簡易分包機及び電子秤を借入れできたのは大変ありがたかったです。また、院外処方への対応は、開局している薬局の情報を御船保健所から入手し、片っ端から調剤協力を依頼しました。さらに、各方面からの医薬品、消毒薬等の支援物資も続々届き活用させてもらいました。このような状況が10日程続きましたが、薬局としての存在を示すことはできたと思います。仮診療所の閉鎖に伴い薬局も病院へ引き上げました。

5月中旬、病院の給排水、電気系統等の仮復旧が徐々に進む中、患者さんの再入院を少人ずつ受け入れ始め、調剤も開始しました。6月15日から、転



院していた患者さんの再入院受け入れも開始。第一陣は、菊池有働病院からの患者さん達12人で、マイクロバスが到着した時は「お帰りなさい。お疲れ様でした」と心でつぶやいていました。当院にもやっと活気が戻ってきたのを感じました。

この日から次々に患者さんが帰って来られ、薬局も徐々に本格稼働となりました。地震発生から2ヶ月が経っていました。

今回は計り知れない多くの方々からの色々な協力をいただき、何とか難局を乗り越えることができました。日頃からの人と人とのつながりが如何に大切であるかを感じた災害体験でした。



岩宮先生とのご縁に感謝して

心理療法士 豊田 佳代子

地震前より、子ども外来主催で島根大学教授の岩宮恵子先生をお招きし、児童・思春期に関する講演会を行おうと企画していたところ、地震が起き、それどころではなくなりました。一旦は被災の状況をお伝えし、お断りしていたのですが、被災直後から岩宮先生にご連絡をいただき、何かとお気遣いいただきました。その中で先生から、もしよければ講演会を予定していた6月25日に来熊し、何かお役に立てることはないだろうかとお申し出をいただきました。しかし病院の状況を考えたときに、どこでどのような形で先生をお迎えするのかを悩み、しばらく時期を待って下さいとお返事させていただきました。そして5月末、外来が再開し、私たちも1病棟の一室に居を構えた頃、今の私たちができる範囲で先生をお迎えしようということになりました。

予定通り6月25日、院内のスタッフに向けてポスターで広報し、有志のメンバーが集まって、岩宮先生を囲んでの座談会を開催しました。集まったス

タッフそれぞれが自分の子どもたちに関する悩みや不安、近況などを思いつくままに話し、分かち合い、アドバイスをいただ



きました。先生の柔軟ながらも鋭いお話を囲んで、時に笑い、時に苦悩を語り合うことは、地震後の“今の自分”を言葉にする良い機会となりました。

その後も岩宮先生には10月、2月にも来ていただき、スクールカウンセラーや養護教諭を招いての座談会、箱庭を使用したケース検討会などを開催しました。また、岩宮先生を通して、日本箱庭学会から地震で散乱してしまった箱庭の玩具類、小さな持ち運びできる箱庭などの寄付も頂戴し、息の長い支援をいただいています。



「うつ病診療セミナー 震災と日本人の集団凝集性」

不知火病院 徳永雄一郎院長

2017年2月7日夕方、不知火病院の徳永雄一郎先生が講演に来られました。

壇上に立たれた徳永先生は少し戸惑われているようなお姿で、気にかかりました。その疑問は講演が進むにつれ、被災地である益城病院で、復興や職員の実態を感じようと私達を気づかい寄り添おうとされているお姿だとわかり、じんわりと胸が熱くなりました。

日本人の特性から支援を受けることに感謝し、それに応えようと頑張る一方で、弱音を吐けず疲れてくる特徴について触れられました。地震から約10ヶ月を迎え、復興に前向きに頑張ることが当然という雰囲気の中、この時期だからこそ、頑張り過ぎていませんか、そろそろ疲れが出ていませんか、との声かけだったように思います。益城病院はまさにそのような時期をむかえており、そんな私達に「この被災を成長体験につなげていく。必ず財産となり得るので、踏ん張ってください」「子ども達は親の姿をしっかりと見ています。自分たちを過小評価しないように」と伝えられました。また仕事に70%、休日に30%と「お休みに余力を残すことが大切」というお話は、家と職場の双方で被災し、長期的な歩みを余儀なくされた職員に安堵感を与えて下さいました。

ご自身は正直に患者さんと向き合い、医師として逃げないという信念をお持ちの先生ですが、かわりの中で本当にほっとできる、また臨床で疲れた時に癒してくれる、そんな風の通り道、場所を知っておくことがストレス発散、と話され、先生のお人柄に触れる機会ともなりました。

2月9日、不知火病院スタッフが慰問され、職員全員に草木饅頭を差し入れて下さいました。手に取った小箱の中には、徳永先生から『少しでも力になれば…』とメッセージが添えてあり、先生から風を感じた瞬間でした。

東日本大震災時、不知火病院の支援を現在の復興や支援の礎にされてきた福島にあさかホスピタル。そのスタッフが、熊本地震による被害でも益城病院を手厚く支援して下さいました。あさかストレスケアセンターの神山寛之さんに講演の報告をするとともに共感され、先生について、「被災でつまずいた私たちに対して、体をかがめて同じ目線に立ち、まずは手を差しのべ、ゆっくりと私たちのペースで立ち上がることを手助けしていただいたような感覚でした」と表現されました。徳永先生が福島と熊本をつなぎ、力を与えて下さったと実感しています。そして共に歩む仲間は次なる力を生むと信じています。

文責：臨床心理士主任 小松哉子



益城病院スタッフの皆様へ

【寄稿】岡山県精神科医療センター院長 **来住 由樹**

岡山県DPATは、DPAT先遣隊の一員として、4月15日朝8時に陸路で熊本に向け出発し、夕刻には熊本赤十字病院DPAT調整本部に到着しました。そして、被災地を見ないままコーディネイト業務につき、役割に徹しました。初期の転院ミッション(561名)のあとは、避難所巡回の調整業務。各チームが毎日数件の面接を行うものの、現地の人たちに必要なことができている実感が持てませんでした。4月下旬となり、ニーズが減じて撤退も考える必要があるとの現地チームからの報告に、岡山本部は「ニーズに出会っていないのでは？」と考えました。そこで私、来住が現地調査と調整のため30日に熊本に向かい、益城町と益城病院の様子を目の当たりにすることとなりました。そして、DPAT活動と現地のニーズとのミスマッチにようやく気づいたのです。「DPATは何ができるのか」でなく、「現地は何を必要としているのか」の視点が不足していました。

ただちに、DPATとの連携を視野に入れつつも、自律的に活動できる別の組織の活動開始が必要と考えました。岡山県に帰り、岡山県精神科医会拡大理事会に諮ると、『益城病院支援チーム岡山』を岡山県の精神科医療機関全体で支えるとの決議が全会一致でなされました。そして、益城の皆さんと一緒に時間を過ごさせていただくことになりました。

『益城病院支援チーム岡山』の活動マニュアルに

は、「心得」が記されています。私たちが大切にしていることであり、抜粋して紹介致します。「求められているニーズに応えることが基本で、支援の押し付けは迷惑であると心得る」、「被災地の職員、要支援者の負担を軽減しつつ成果を上げることが必要であり、被災地の負担になる依頼をせず、自分たちの活動に必要な事は自ら解決するよう努める」、「自己完結が基本であり、食事を含め迷惑をかけないように留意する」、「益城病院の支援スタッフであることを意識して働きながら積極的に輪の中に入り、少しずつ専門性を発揮する」。私たちが行った事は僅かですが、少なくとも、心はともにありたいと考えてきました。

益城病院の職員たちは、前震後の停電の中、患者さんを転院と退院で守り抜かれました。サバイバルキットは、職員だけでなく全患者に配られ、断水の中、生き抜かれました。自宅が被災して避難所に身を寄せながら子どもも連れて勤務し、地域の医療を守り抜かれました。その平常心を維持し続ける力とチームワークに感動し、元気をいただきました。益城病院が体験され克服しつつある事は、きっと次の被災地の力になります。岡山チームは、DPATの制度改革を行うため、益城病院での体験から意見を述べたいと思います。また、私たちに多くのお気遣いをいただいたことに心から感謝致します。



益城病院の年輪

【寄稿】あさかホスピタルグループ 診療支援アドバイザー **渡邊 忠義**

憲法記念日の昼前、阿蘇地域でのDPAT活動を終了し、益城病院1階認知症治療病棟の生活機能回復訓練室を訪れた。そこは益城病院本部として位置づけられ、病院業務をコントロールする場となっていた。

翌週から始まる益城病院支援の事前挨拶に伺ったはずが、犬飼理事長と松永院長にあたたかく迎えられる一方で、被災現状の凄まじさの一つひとつを目に耳にするたび、言葉を失っていた自分を思い起こす。無念、不安、困惑が入り混じった極限の状況下においても来客への笑顔や配慮を欠かさないお二人の顔を思い起こすと今でも目頭が熱くなる。

あさかホスピタルグループは、東日本大震災の際に九州をはじめ日本中からいただいた優しさに、少しでもお返しができるほどの思いから、8週間の益城病院支援を行うことになった。多くの職員の賛同と協力の意思表示を得て、まもなく4週目の支援が終わろうとしている。派遣メンバーの多くは、熊本に向かう日が近づくと何ができるのか、何を行えばいいのか、支援という大義名分を重く受け止めていたが、日々、益城病院職員の皆さんと交わす挨拶、交わす笑顔の中で私たちが救われていたことに気付

いた。

私たちが臨場した期間は限られてはいたが、生きることそのものに大きな打撃を受けた職員、避難所から出勤し言葉にできない焦燥感をいつも背負っている職員、そんな職員を支えようとしている職員などさまざまな職員に出会った。

支援らしい支援ができないまま終盤を迎えた金曜日の朝、理事長先生をはじめとした幹部職員の英断を伺った時、益城病院に一筋の輝きを見た。目標達成までの道程は険しいかもしれないが、皆、その光を目指しているように感じた。その場に同席できたことで、改めて支援の意義を噛み締めた瞬間であったように思う。

益城病院のホームページに開設65周年を記念した犬飼理事長の言葉を見つけた。「樹木の年輪は成長も停滞も含め環境変化を表現するといわれています。益城病院の年輪が今後どうなっていくのか楽しみでもあります。」

今、色濃い、意味のある年輪を創っていると思う。
“がんばっぺ！くまもと。やってみっぺ！ましき”

2016.6.3

日常を取り戻す!

1病棟 重度認知症治療病棟長 梅田 亮一

被災で転院した認知症高齢者にとって環境の変化はとても大きな負担になったと思います。スタッフも被災し、車中泊や避難所で慣れない生活を送ったと思います。それでも再入院の際、スタッフ全員が笑顔で患者さんを迎え入れ、これまで以上に患者さんに寄り添う看護、介護が実践できる様になったと感じています。

2病棟 精神療養病棟長 工藤 弘美

6月から転院していた患者さんを徐々に受け入れて行くなか、私達は在宅診療部を立ち上げ、交通網が閉ざされた外来患者さんの診療、訪問看護に関わり、在宅生活をする患者さんに必要な支援を学ぶことができました。被災者でありながら逆に病院の事を心配して下さる患者さんに勇気もいただきました。今は病棟が通常に戻り、これからは入院患者さんの支援を頑張ります。

3病棟 精神療養病棟長 山下 義晴

スタッフも被災者で、不安定な生活の中でしたが、患者さんの受け入れが決定すると、安心・安全な病棟作りにはスタッフが取り組み、一同の心が一つになりました。毎日に清掃、ワックス掛けして精を出し、少しずつですが患者さんの迎え入れが整い、病棟に明りが灯って希望のような感じを受けました。

副看護部長兼橋病棟 急性期治療病棟長 金子 元子

急性期病棟の再開から10か月が過ぎ、多忙な毎日を送っています。患者さんに寄り添う看護の中で日常を取り戻しつつあることを実感しています。被災を機に色々なことに気づかされています。治療環境が整い、さらに患者さんにとって安心して療養していただけるよう頑張っていきたいと思っています。

外来主任 高橋 富陽

「花へんろ」から戻った当初は、患者や家族の方々も地震の話題が殆どで職員同士でも安否を気遣うなど、共感の時期だったように思います。時とともに当院や町のインフラも整い、外来でも地震以外の話題や笑顔が増えてきました。復興には長い時間がかかると思っていましたが、あの日からもうすぐ1年。お互い助け合いながら元の生活を取り戻しつつある現状に、安堵と感謝をしています。

経営管理室係長 佐伯 貴志

地震後1年を前に、時間を刻む感覚が少しずつ戻りつつありますが、本格的な復興はこれからであり、今の季節のような「三寒四温」のように感じられます。この時期を乗り越えれば、「日常」という春が訪れるのだと思います。



医療情報室 廣松 直美

益城病院に戻った頃はカンファレンス室を占有し、サーバー復旧作業と、使えるPC類の再設置に追われました。その後は病院の復旧に合わせてシステムの移設や拡充を繰り返し、被災9か月後にして医療情報室とサーバー室も元の場所に戻りました。ようやく気持ちにひと区切りがつき、これから新たに築いていく時期との思いです。

認知症デイケア主任 緒方 由美

益城病院での想像を超えた激動の一年。地震を通してたくさんの「有り難し」を学びました。恐怖、混乱、無我夢中、忘れたい、忘れない、涙、団結、繋がり、ありがとう、がんばる、心を動かす力、変わろうとする力、復興、葛藤、願い、その先へ…と心の変化をたどり、今に至ることの「有り難し」を胸に、これからも心の復興を祈り続けたいと思います。

**地域活動支援センター「アントニオ」主任
山迫 浩史**

本震から元の業務に戻るまでは、ひたすらアントニオ利用者の安否を確認したり、コスモや共同住居の方々の支援をしました。自分自身や家庭のこともあったので記憶が曖昧です。今後、街並みや建物が復旧・復興するに伴い、我々スタッフも当事者の方々と一緒に考えながら、徐々に生活が安定していけばと思います。

リハビリテーション科長 本田 隼人

本部が病院に戻った頃は、病院関連施設の日中活動や、入院患者の受け入れに向けた活動場所の準備、備品の調整などを行っていました。患者さんの生活の中に、作業活動などを提供することができ、その重要性を感じました。その後、再開したデイケア活動への参加など、今後の不安を抱えながらも、回復への思いも広がってきました。

地域連携・相談室長 古閑 博隆

本部機能が病院に戻って以降、受診や入院等の相談業務に費やす時間が徐々に増えました。日々変化する病院施設や機能の復旧状況を把握し、「今できることは何か」「出来なければ他に方法はないのか」等を念頭に置きながら、相談者への対応や支援方法を考えることで、自分自身も“日常”を取り戻していったように思います。

精神科デイケア主任 本村 一生

5月2日に精神科デイケアは再開しました。給排水が出来ない状態だったため、仮設トイレを使用し、利用者の水分補給用にペットボトルの水を運び、手洗いに使用した水はバケツに溜めて屋外に捨てるなど多忙な日々でしたが、少しずつ被災から立ち直っていく病院や職員を見て、人の強さというものを感じました。

病院復旧の現場にて

経営管理室 係長 佐伯 貴志

地震後、対策本部が移った特養「花へんろ」では、週明けから診療機能回復を目指す方針が打ち出され、使命感で気持ちが高揚している人、不安に駆られている人など様々ある中、私は病院内の復旧班の取りまとめをしました。

地震前の3月末、災害派遣精神医療（DPAT）研修を受講した内容を思い起こしながら、復旧にあたる職員の安全と負担軽減を心がけ、活動は時間を短めに班単位で行うようにし、とにかく焦らず余裕をもって作業にあたるよう呼びかけました。建物内の臭気や、内外部の損壊は気力と体力を半減させます。復旧が大きな目的ではありませんが、目の前の作業をこなすことで、また職場の仲間と地震の体験

を共有することで、それぞれの不安が軽減し絆が深まることが私の願いでした。

1日ごとに余裕のある計画を立てて取り組んでいたのですが、みんな懸命に作業したことで、1ヵ月ほど見込んでいた復旧作業は約2週間で目途が立ち、本部を病院に戻せるようになりました。当時は、1日が過ぎるのが早かったのですが、日にちが経つのは遅いという変な感覚でした。作業に来て泣きながら話していた女性職員の姿は今でも忘れません。

「ダイジョウブ」という曲があります。その歌詞のように、一人ひとりを笑顔で支えることができますようにとの思いを込め、これからも努めていきたいと思えます。

復旧班の作業風景



第4期

2020年に向けて

タイムライン第4期 (2017/1/1 ~)

- 1月 4日(水) **年頭の式典。**
- 5日(木) **内科「ひろやすクリニック(院長 永田美与)」開院。**
パン工房「まりも」店舗再開。
- 14日(土) **臨時広報誌Reborn Vol.3発刊。**
- 23日(月) **益城病院復興『PLAN2020』始動。**
- 2月 1日(水) **益城病院歯科診療再開。**
- 3日(金) 益城中央線(県道熊本高森線)都市計画4車線化決定
- 7日(火) 職員研修開催「うつ病診療セミナー 震災と日本人の集団凝集性」
講師:医療法人新光会 不知火病院 院長徳永雄一郎氏。
栄養管理科給湯管破断
- 15日(水) 職員研修開催「これからの精神科医療に求められるもの」
講師:(株)ヘルスケア経営研究所 酒井麻由美氏。
- 20日(月) **犬飼記念美術館再開「ひな飾りと市松人形展」。**
- 21日(火) 熊本地震被災記録誌「あの時わたしは」制作第1回会議開催。
- 25日(土) 俳優の岸部一徳氏が益城病院慰問。
- 3月 3日(金) **病院行事食「ひなまつりバイキング」実施。**
- 10日(金) **第2外来診療棟跡地にロータリー駐車場新設。**
- 19日(日) オハイエくまもと『とっておきの音楽祭』へ益城病院アントニオバンド出演
- 4月 1日(土) 院長杯グランドゴルフ大会開催 職員と患者さんの親睦イベント開催
- 3日(月) 全体会開催
- 15日(土) 熊本地震一周年祈念式典～今日まで、そして明日から～開催。
パネル展示、山本恭司ライブ等。
祈念講演「益城病院復興に向けて」
講師:福岡大学名誉教授 西園昌久氏。



被災時に役立ったもの

〇 発電機

地震後、屋上に設置した非常電源装置に給油できず、使える自家発電装置は小型2台のみだった。本震翌日、悪路の中を平成病院から自家発電装置8台とガソリン缶8缶、不知火病院から自家発電装置1台とガソリン缶10缶、ほか備品等が届けられ、電源を確保することができた。



〇 緊急避難バック

東日本大震災後、患者・職員用に約500個導入し、半数を病院建物内の避難経路に配備、半数を職員に配布していた。前震時、入院患者や職員はバッグを背負って避難した。水、レジャーシート、軍手、多機能ライトなどが重宝した。その後も、建物内の片付けや移動時は部署名、名前を明記したバッグを背負い、人物確認をし易くした。



〇 自動ラップ機能搭載トイレ「ラップポン」

断水状態で排泄後の処理に苦勞していた時、支援物資として届いた。1回毎に排泄物を凝固剤で固めて自動密封するので、水が要らず手も汚れない。1回セットすれば50回ほど使用でき、長時間使用可能な充電式で手間もかからず、感染予防と職員の労力軽減につながった。グループホーム「ふるさと」、認知症デイケア、橋病棟で使用した。



〇 蛇口付き給水タンクと消毒液

玄関に蛇口付き給水タンクを置き、自衛隊の給水に対応。玄関で手洗いとアルコール消毒をしてから入室することで、感染症の発生を防ぐ事ができた。



〇 「どこでもシート」

災害対策本部に広用紙を貼りだし、連絡先や必要事項を書き出して情報共有に努めた。「どこでもシート」は静電気で壁に張り付いてホワイトボードのように書くことができ、便利で使い勝手がよかった。



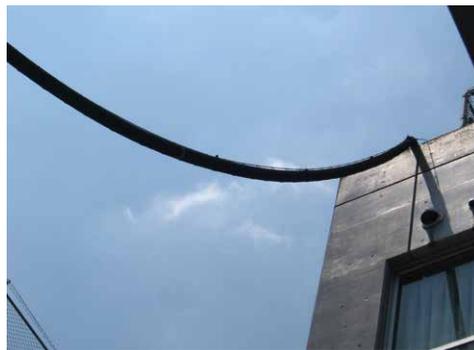
病院内外の復旧過程



管理棟総合受付

電気

西側擁壁



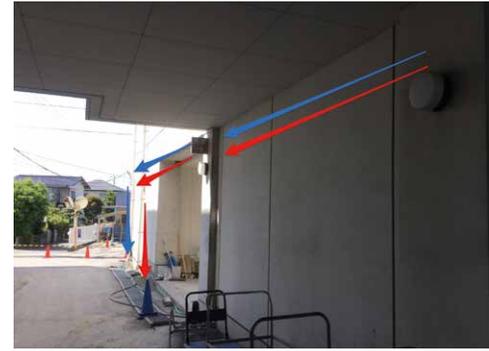
院内舗装



ロータリー



給排水



病院内外の復旧が進むにつれ、
スタッフにも
少しずつ笑顔が戻ってきた。





益城病院座談会

～今日まで、そして明日から～



事務次長 宮崎 翔

看護部長 水田 由紀

事業課長 福本 英子

施設係主任 村上 誠一

理事長 犬飼 邦明

相談支援事業所アクト二オ主任 山田 浩史

在宅診療部長代理 増田 なみ子

傷だらけだった病院内外の修復が進むにつれて、
 スタッフにも、医療人としての誇りと笑顔が少しずつ戻ってきた。
 そして益城病院は、2020年の移転再生に向け舵を切った。
 地震から1年が過ぎようとする今、怒涛のような日々をふり返り、
 苦難の先に広がる新しい明日を展望してみたい。

誰もが死を身近に感じたあの日

犬飼: 1年が過ぎた今、職員の皆さんは被災者でありながらも医療人として心の傷を表に出せないでいるのではないかと感じています。自分自身の目に見えないストレスを自覚できていないのでは？と、自分自身を振り返って感じているところです。つらいと自覚する間もなくエネルギーに動いてきたように思います。皆さんの気持ちはどうですか？

宮崎: 色々な事があり過ぎて記憶が飛んでしまっている自分がいます。最初の地震の時にいた事務所に立つと、その時の恐怖が今も鮮明によみがえり、

一種のトラウマになっているのを感じます。

犬飼: 9時頃までは、みんな病院にいたんですね。

宮崎: あの日、想定外の大きな揺れに呆然としながら、廣松さんがまだ残っていると思って3階の情報室に行きました。廣松さんのいた場所には建具が倒れ、呼びかけてみたが返事はなかった。帰宅して無事だったことがわかった時のほっとした気持ちを思い出します。それから、患者さんと職員の安否確認に病院中を走り回りました。

増田: 確か8時半まで私たちも病院にいて、家に帰り着いてすぐに地震が来たんです。

宮崎: 死を身近に感じた生まれて初めての体験でした。被害者が出ていたらショックはもっと大きかったと思います。

山迫: 自宅で子供と風呂に入っている時、激しく揺られて突き上げるような衝撃がありました。急いで上がってテレビをつけると画面に「益城」の文字。心配でたまらなかった。そこへ次長からメールが届き病院の状況が分かったんですが、怖がる子どもたちを守るのを優先させて頂きました。翌朝、出勤すると、病院は戦争状態でした。寮にお住いの患者さんをサポートしに駆けつけたことを思い出します。

増田: 私は被害の大きかった地域で、周りの家がみるみる壊れるのを体験しました。近くに住む次男が来て、小さい孫たちを集めて庭にテントを張りました。宮崎次長から、地震後すぐに病院の状況を報せるメールが来て、「状況をみながら出勤してください」という言葉に救われました。

夜が明け、崩れた道を歩いて1時間かけて出勤してみると、理事長のテキパキとしたリーダーシップが頼もしかったですね。16日はテントの中に寝ている時、本震で次男の家も我が家も全壊。隣の家は2人生き埋めになり、救助にあたりました。本当に悲惨で、公民館も壊れて非難するところもなく、一日休みを頂きました。

山迫: ケースワーカーとして外を歩くことが多く、悲惨な町の様子を見てきました。18年勤めて、益城は自分の第二のふるさとです。潰れた家が片付けられ、瓦礫の撤去、更地と町並みが変わるのに心がついて行けないのを感じています。他の病院のケースワーカーの気遣いや応援、ちょっとした言葉かけがどんなに嬉しいか。患者さんの娘さんの高校入学とか結婚の報せを聞くと、救われるような気がします。

村上: あの日は電話もつながらず、様子がわからないまま恐る恐る出勤したんですが、市内から益城に入った時、鳥肌が立ちました。本震の後は、機械のエラー音が溢れて、高圧電線が切れ、ライフラインはすべて使えず…水が出ないのが何よりつらかった。見た目は随分きれいになり道も平らになりましたが、今でもまだ、応急的な修理であったり、一部水が出ない箇所があったりと、まだまだ課題はあります。

犬飼: 199名の患者が入院を続けるのに必要なライフラインと食べ物と安全な環境がない。停電して水も出ず、病院機能がストップしている。前震のあった後の深夜1時か2時には転出を決断したと思いますが、冷静だったかと言われると、そうでもない。生きるか死ぬかの瀬戸際で直感的に判断したんでしょう。明け方まで移送方法をあれこれ考えていました。

水田: 送り出す時は慌ただしくて、歯ブラシ一本持たせてあげられない患者さんもいました。後からスタッフに患者さんの顔を見に行ってもらったんですが、受け入れ先がどんなに大変だったかわかりました。その時は余裕がなくて、本当に申し訳なかったと思います。

犬飼: あの時は町全体の被害の大きさがわからず、1、2週間で戻って来てもらえると思っていました。日が経つにつれて深刻さが身に沁みたとというのが正直なところです。

水田: 地震後は非日常の中で片付けに追われていたので、患者さんが戻って来られて、夜勤のスタッフが笑顔で食事介助している姿を見た時は嬉しかったですね。

増田: 隣の方や外来に相談に来られた患者さんなど、亡くなった方のことを思うと心が痛みます。「花へんろ」から異動したばかりで知らない職員も多

く、水田看護部長や堀副長に支えられました。上手くいなくて泣いた日もありますが、被災によって職員との距離が近くなりました。職場があって本当に良かったと思います。

水田: 家も被災し、家族を置いて出勤してくる人も多くありましたから、その気持ちを思うとつらかったですね。そんな状況でも、スタッフみんなが一つにまとまろうとする気持ちが強かった。毎日の全体会や情報発信があったのも助かりました。

有り難かった支援の数々

犬飼: しばらくは患者さんの事に必死で、支援の受け入れ方もわからなかった。駆けつけてくれた人たちの力を生かしきれなかったのが残念です。

水田: 特に、5月の連休明けから2ヵ月間も、九州内の大学や岡山県精神科医療センター、福島のあさかホスピタルから来ていただきました。

犬飼: あさかホスピタルの看護部長には「何もなくていいから、水田さんの横におってください」と言いました。被災の経験のある人に、ただ支え寄り添ってほしいと思った。

水田: 外来患者さんの誘導や枯れたバラの選定を一緒にしながら、一日中お話ししたことを覚えています。スタッフと一緒に片付けをしてくれた方も、たくさんスタッフと話して下さいました。外部の方だから何でも話せて、メンタルケアになったと思います。

福本: あさかホスピタルの方は「何でもします」というスタンスで、頼みやすかったですね。役職付きの偉い方でも快く手伝ってくださって「楽しかったです」と言って帰って行かれました。自分たちもそんな姿勢でありたいものです。

犬飼: 支援を通じて、普通なら会うこともない人との出会いもありました。貴重なセッションも頂きました。

宮崎: 松橋の高齢者グループホームから、患者さんを受け入れたいと電話をもらった時は有り難かったですね。悪路の中、2時間かけて迎えに来て頂きました。人の温かさ感激し、「逆の立場ならできるだろうか」と考えました。

村上: そうですよ。施設課では、建築業者からの助けが大きかった。建築会社から「うちの人間を使ってください」と連絡があり、有り難かったです。患者さんに1日でも早く安心して帰ってきてもらえることが最優先の使命だったから。設備破損状況が全くわからず、実際に一つ一つ確認調査しながらの難しい作業でしたが、皆さん前向きで…。

佐賀から応援に来た人たちは、山鹿の職員の家に十数人で泊まり込んで益城まで毎日通い、休みなしで働いてくれました。

山迫: なぜ益城だったんだろう？なぜ自分たちがこんな目に？と、考えても仕方ないことを思っていました。東日本大震災の被災者のことも、どこか他人事と思う自分がいたんじゃないか。当事者になって初めて、状況の深刻さに気づかされたと思います。

つらい中にも嬉しい瞬間が

犬飼:6月の中旬、橘病棟の水道が開通したということで、蛇口をひねって水がほとばしり出た時の気持ちは何とも言えなかった。橘病棟と本館が行き来できるようになり、また給食の配膳ができるようになって本当に感動しました。

福本:凸凹道を歩いてくる外来の患者さんが痛々しかったから、舗装された時が一番嬉しかったですね。

犬飼:梅雨時、悪路を上がって来られるご高齢の夫婦の姿を見た時、病院として「こんな事をさせていいの？こちらから出かけて行くべきでは？」と思い、訪問診療がスタートしました。

増田:怪我の功名というか、在宅診療部という新しい活動が生まれたんですね。

犬飼:「花へんろ」に居候していた頃は職員の食べる物がなくて、伊藤さんが一生懸命調達してくれた。役場で物資を配る列に、山迫さんも何度も何度も並んで…うちの職員は真面目だなと思いました(笑)

増田:それを小松CPが上手に分けて、みんなに行

き渡るように配ってくれていました。栄養科の人たちの工夫が大きかったですね！それからボランティアの方々。一番乗りは、泊まり込みで4回も炊き出しをしてくださった広島山口さんでした。ホテルキャスルの斉藤料理長の美味しいラーメンも。職員の喜ぶ顔が忘れられません。

福本:入所施設のスタッフが、強い責任感を持って入所者を守ってくれたのが嬉しかったです。認知症対応型の高齢者施設で、各自、家で炊いたご飯を持ってきてくれたりして、食事をいつもどおりに提供したかったという思いを知り、患者さんへの強い思いに感動しました。

増田:避難バッグは役に立ちましたね！

山迫:そばにあるだけでも「お守り」のように思えたいし、銭湯が無料解放された時、避難バッグの中に石けんが入っていたのが嬉しかったです。

水田:患者さんがバッグを背負って、ヘルメットをかぶって…。皆さん、とても協力的でした。

そして、2020へ向けて一歩ずつ前へ

犬飼:ラッキーが積み重なってここまで来られた気がします。本当に恵まれていた。

水田:そもそも、地震当日に理事長、院長、事務次長が揃って在院していたのが幸運の始まりで、すごく心強かったです。

犬飼:災害に遭い、システムは大きなダメージを受けましたが、幸い、死者や怪我人が出なかったこと

が何より嬉しい。しかし、職員がその日暮らしで未来を描けないと、疲労感ばかりがつのります。「今の苦勞がいつか役立つ。これからもっと良くなる」と思えるようでないと…。3年後には何とかなっていたい。

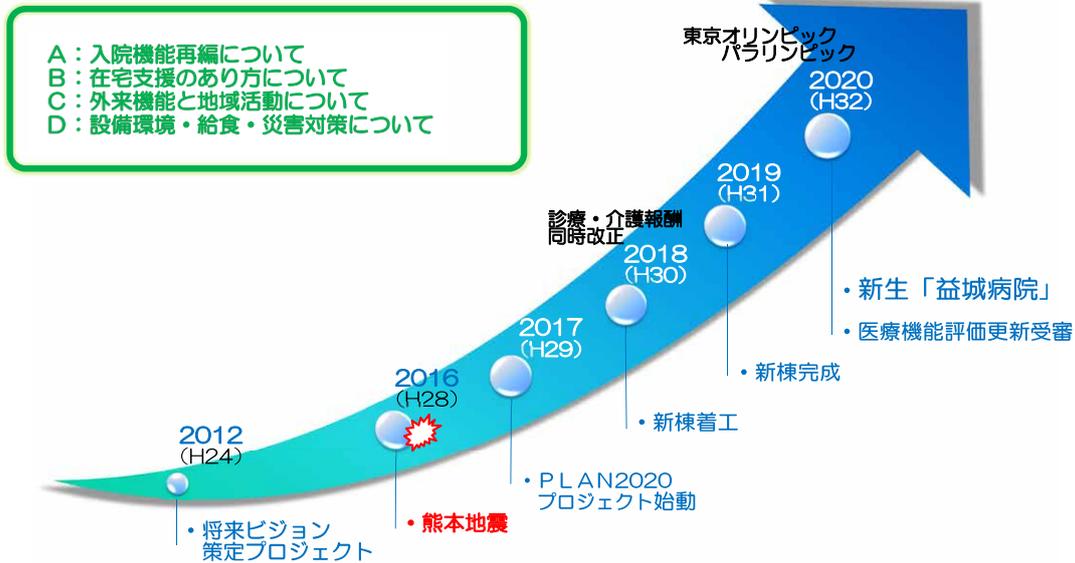
宮崎:昨年、大規模リフォームに着工しようかという矢先に被災したんですね。

社会医療法人ましき会

益城病院

PLAN2020プロジェクト

「PLAN2020」は、2020年（H32）に復興を遂げた新生「益城病院」のあるべき姿を描いたものです。被災地域が再建を進めていく中、当院は医療機関としての役割を担い、社会に貢献していく力強いメッセージを発信していきます。



犬飼:いつかやるべき事が前倒しになったわけです。2020年という期限が定まった。地震がなければ、できなかった事かもしれません。

宮崎:幅広い人が参加して、みんな積極的に意見を言うようになりました。

犬飼:職員の皆さんに“やらされてる感”がないといいますが。

増田:失うものも大きかったけれど、今こうしてスタッフと笑って話せる幸せがありますから。

宮崎:まだ疲労感はありますね。地震を理由に色々な事を断ったり、避けたい自分もいる。「ありがとう」のひと言が妙に心に沁みたり。

犬飼:こういう機会がなければ知り得なかったことが、たくさんあります。あの増田さんが泣いたりとか。

増田:涙もろくなったんです(笑)

犬飼:古傷をえぐるようだけど、つらかった出来事を押し込めてはいけないと思うんです。今、一つの区切りとして振り返りながら、これから何をするか、あらためてみんなで考えていきたい。

福本:どこか一歩ずつ前進すれば、みんながそれぞれ持っている辛い気持ちは少しずつ小さくなっていくと思います。

増田:今やっている相談支援や「いきいきカフェ」を一步進めて、いずれは退院後も再入院しなくてすむような定着支援、訪問支援ができるシステムも作りたいです。

犬飼:ピンチはチャンスといいます。何かをつかんで起き上がる時、今まで以上の病院になればいい。自分自身も被災前は「そろそろゆっくりしようか」と思っていたのが許されなくなったけれど、それもプラスに考えようかと。嘆いていても仕方ないから、前を向いて行きましょう。

穏やかな時間を呼び戻すために

会長 犬飼 由貴子

今年もまた桜の頃となりました。季節は変わることなく平和を告げてくれます。ふと、昨年の桜の頃のことを思い出してみようと試みますが、なぜなのか浮かんでこないのです。あの直後に襲った地震の後、様々な事態に振り廻された未曾有の一年となりました。職員の皆さんにも、不自由な生活を送らせてしまいました。

何もかもが破壊され、全ての人が途方にくれて希望を失いました。その頃、院庭に咲いていた数々のバラの花が院内の人々を慰め励ましてくれて、あの時、病棟のあちこちに挿されたバラ一輪の美しかったことが印象的です。

この大試練を乗り越えて今、復興への一步を踏み出そうと心を新たにしています。十周年を迎えた院内の美術ギャラリーには、例年の如くひな祭りを企画し、ひな段をはじめ、時代を見つめてきた数々の人形を展示できるようになりました。

新年度から、また新しい企画をもとに再出発を目指しております。







2016年5月10日撮影

感謝と御礼

院長 松永 哲夫

本冊子を最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。熊本地震は、客観的な数字やデータから言えば、東日本大震災のおよそ100分の1でしょうが、やはり当事者にしてみれば、いろんなものをなくしたり、いろんなことが起きたり、いろんな人が去って行かれたりといったように、いろいろ大変でした。出勤して来られたので互いの無事を喜んだら「家はだめでした。全部、なくなりました」と泣き崩れたスタッフもいましたし、「半壊の自宅に小学生の子供を一人残して仕事に出て来ている」と涙ぐむスタッフもいました。そこまでして出勤して来なくてもと思いながら、そこまでして仕事に出てきてもらった気持ちに感動しました。そんな話は数え上げればきりがありません。院外からもたくさんの支援をいただきました。そんなこんなで約1年が経過して、みんなの力が合わさって、病院機能は何とか8~9割回復することができました。

私事で恐縮です（「病は市に出せ」と言うので話します）が、昨年10月に膀胱癌の手術をしました。術後、「完治」と言われましたが、機能的にはやはり8~9割の回復といったところです。しかし、健康の有り難さを実感できたり、周りの温かい励ましを感じることができて、「癌になって良かったな」とも感じております。病気の回復も被災からの回復も、似たようなものかも知れませんが、「地震があって良かったな」とはとても言えませんが、みんなで力を合わせてそれなりの達成感も感じられたので、「まんざらでもないよね」といった心持ちです。繰り返しになりますが、最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。





ありがとうの木
たくさんのご支援、ありがとうございました!

1 地震発生時の入院患者状況

① 入院区分

任意入院	88名
医療保護入院	106名
措置入院	5名

② 年齢分布

20～29才	5名
30～39才	13名
40～49才	14名
50～59才	30名
60～69才	47名
70～79才	39名
80～89才	38名
90～99才	13名

③ 疾病別分布

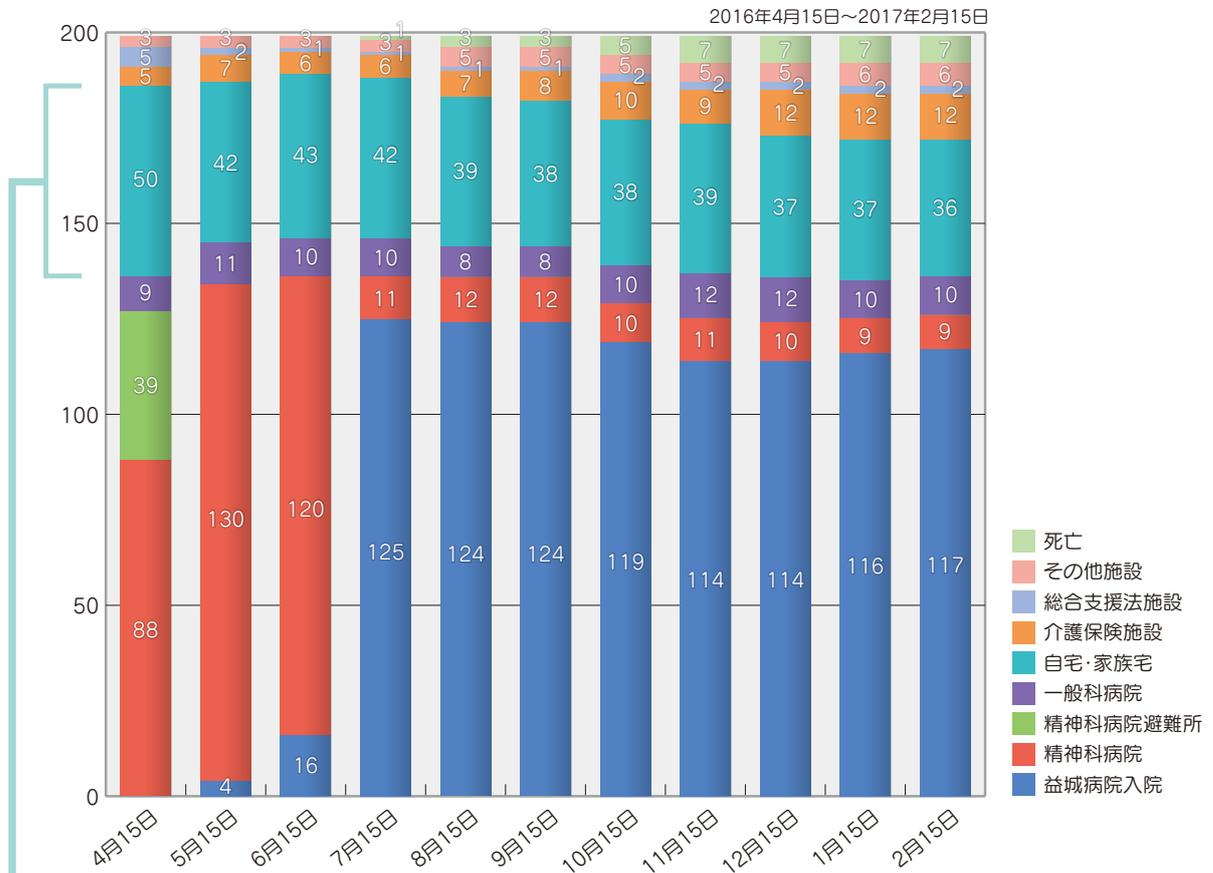
F0 認知症	61名
F1 アルコール依存症	36名
F2 統合失調症	80名
F3 気分(感情)障害	15名
F4 神経症性障害	2名
F7 知的障害	3名
F8 心理的発達の障害	2名

④ 地震後の患者転出先

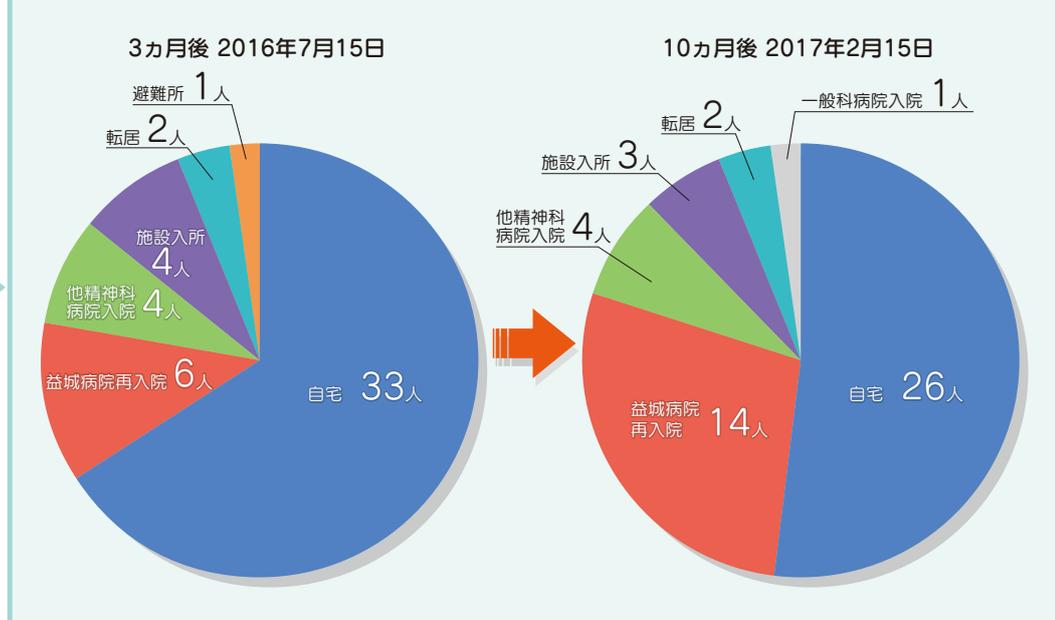
前震翌日			本震				
精神科病院 12病院 88名	阿蘇やまなみ病院(阿蘇市)	20	阿蘇やまなみ病院被災により、 更に転出した患者数				
	菊池有働病院(菊池市)	12					
	くまもと心療病院(宇土市)	12					
	中山記念病院(合志市)	10					
	山鹿回生病院(山鹿市)	8					
	ニキハーティホスピタル (熊本市東区)	5					
	明生病院(熊本市北区)	5					
	八代病院(八代市)	5					
	熊本県立こころの医療センター (熊本市南区)	4					
	弓削病院(熊本市北区)	3					
	くまもと青明病院 (熊本市中央区)	2					
	熊本大学医学部附属病院 (熊本市中央区)	2					
	一般科病院 4病院 9名	十善病院(熊本市中央区)			3	熊本県立こころの医療センター(避難所) から更に転出した患者数	
		博愛会病院(熊本市中央区)			3		
	美里リハビリテーション病院 (下益城郡美里町)	2					
	熊本回生会病院 (上益城郡嘉島町)	1					
精神科病院避難所	熊本県立こころの医療センター (熊本市南区)	39	松田病院(精神科・宇城市)	13			
介護保険施設 2施設 5名	有料老人ホーム 夢のかけ橋 (宇城市)	4	天草病院(精神科・天草市)	9			
	特別養護老人ホーム そよ風の 里ほたる(上益城郡山都町)	1	荒尾こころの郷病院 (精神科・荒尾市)	7			
宿泊型自立訓練事業所コスモ(上益城郡益城町)	5	山鹿回生病院 (精神科・山鹿市)	5	酒井病院 (精神科・天草市)	4		
救護施設真和館(阿蘇郡西原村)	3	自宅	1	計	39		
自宅・家族宅	50						
計	199						

2 退院患者の動向

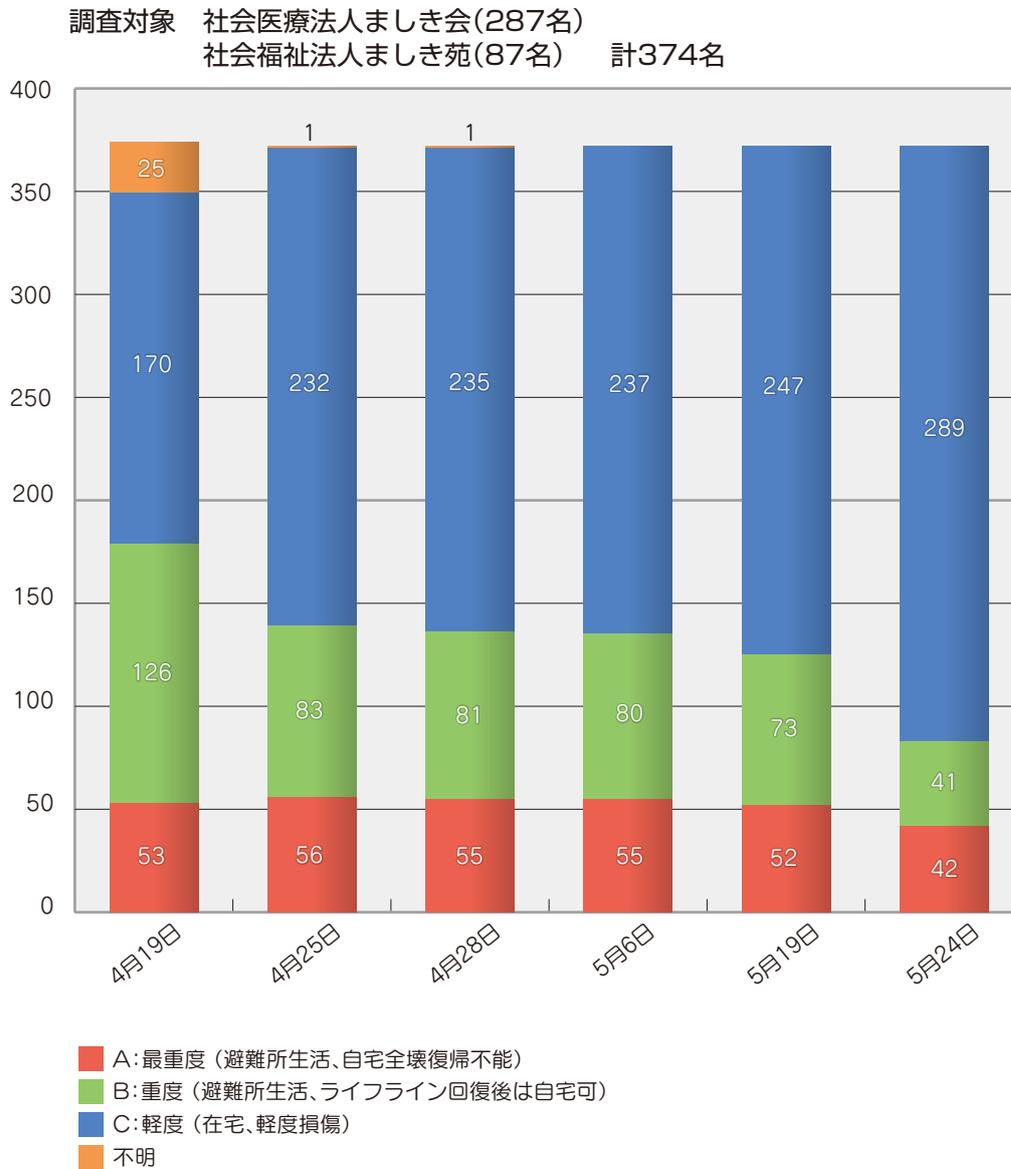
4月15日退院患者199名の退院後10ヵ月間の動向



自宅退院患者50名の3ヵ月・10ヵ月後転帰



3 職員の被災状況



ましき会ましき苑全職員の被災状況を一元化し情報を共有した。
 全職員の約2割は自宅が全壊し帰る家を失い、半数以上がライフライン途絶の中、車中泊や避難所生活を送りながら出勤していた。
 被災後1ヶ月後くらいからは、避難所や車中泊から解放され、それぞれの自宅や仮設住宅などへ移動した。
 しかし、1年経過した後でもまだ25名が仮設住宅に住んでいる。

4 医療・介護支援チームの活動状況

4月

14	15	16	17 18 19 20	21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
21:26 前震発生	各県 DPAT・DMAT	1:25 本震発生		4/23~25 宮城県 DPAT 4/24 栃木県 DPAT 4/19~7/14 介護福祉士会・DCAT (1~6名/1チーム 花へんろ支援)

5月

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31																			
5/4~7 静岡県 DPAT										5/12~15 静岡県 DPAT																																							
5/4~7 石川県 DPAT										5/12~13 石川県 DPAT																																							
5/2~6/17 九州の大学病院 (月・水・金 医師) ・九州大学 ・福岡大学 ・鹿児島大学 ・久留米大学 ・宮崎大学 ・産業医科大学 ・佐賀大学																																																	
5/3~7/2 支援チームおかやま (医師、看護師、PSW、CP、事務 3~5名/1チーム)																																																	
5/3~7 岡山県精神科医療センター										5/8~14 岡山県精神科医療センター ・希望ヶ丘ホスピタル										5/15~21 岡山県精神科医療センター ・たいようの丘ホスピタル										5/22~28 岡山県精神科医療センター ・慈圭病院										5/29~6/4									
5/9~7/2 福島県 あさかホスピタル (看護師、PSW、OT 他 2~4名/1チーム)																																																	
4/19~7/14 介護福祉士会・DCAT (1~6名/1チーム 花へんろ支援)																																																	

6月

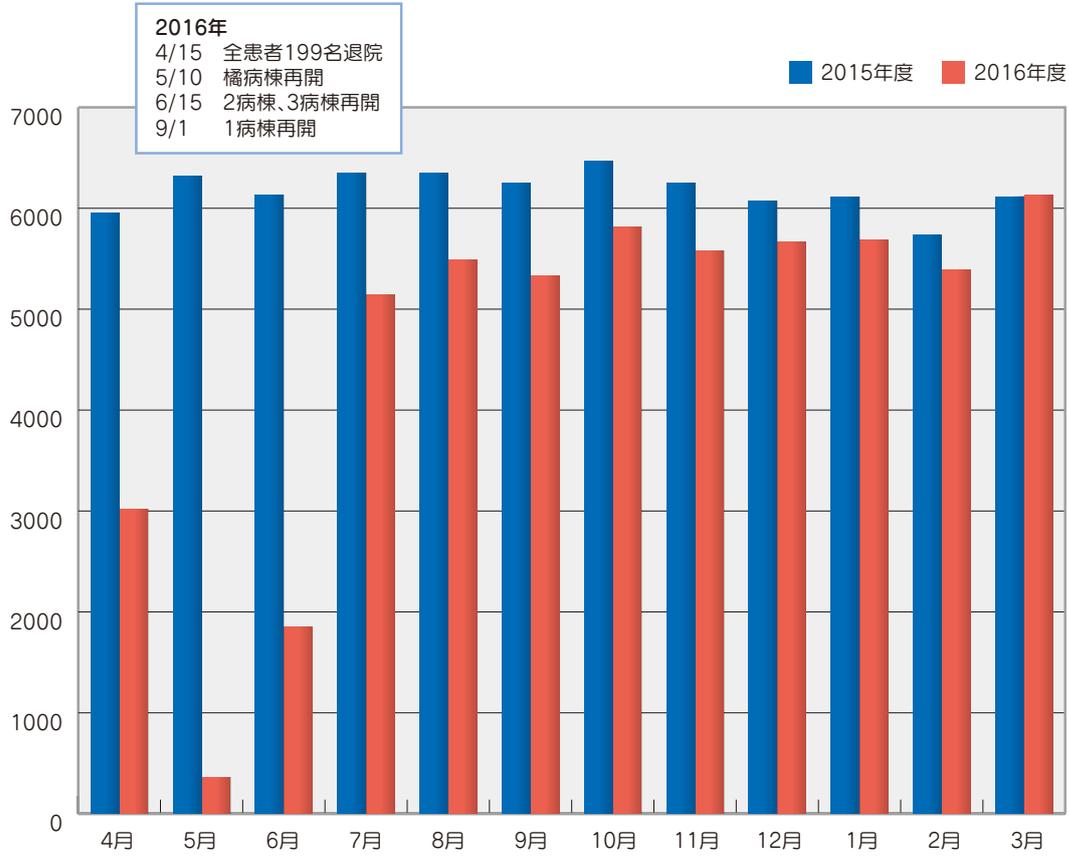
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30																				
5/2~6/17 九州の大学病院 (月・水・金 医師) ・九州大学 ・福岡大学 ・鹿児島大学 ・久留米大学 ・宮崎大学 ・産業医科大学 ・佐賀大学																																																	
5/3~7/2 支援チームおかやま (医師、看護師、PSW、CP、事務 3~5名/1チーム)																																																	
岡山県精神科医療センター ・メンタルセンター岡山										6/5~10 岡山県精神科医療センター ・河田病院										6/12~16 たいようの丘ホスピタル										6/17~23 岡山県精神科医療センター ・岡山大学病院										6/26~7/2 岡山県精神科医療センター ・積善病院									
5/9~7/2 福島県 あさかホスピタル (看護師、PSW、OT 他 2~4名/1チーム)																																																	
4/19~7/14 介護福祉士会・DCAT (1~6名/1チーム 花へんろ支援)																																																	

7月

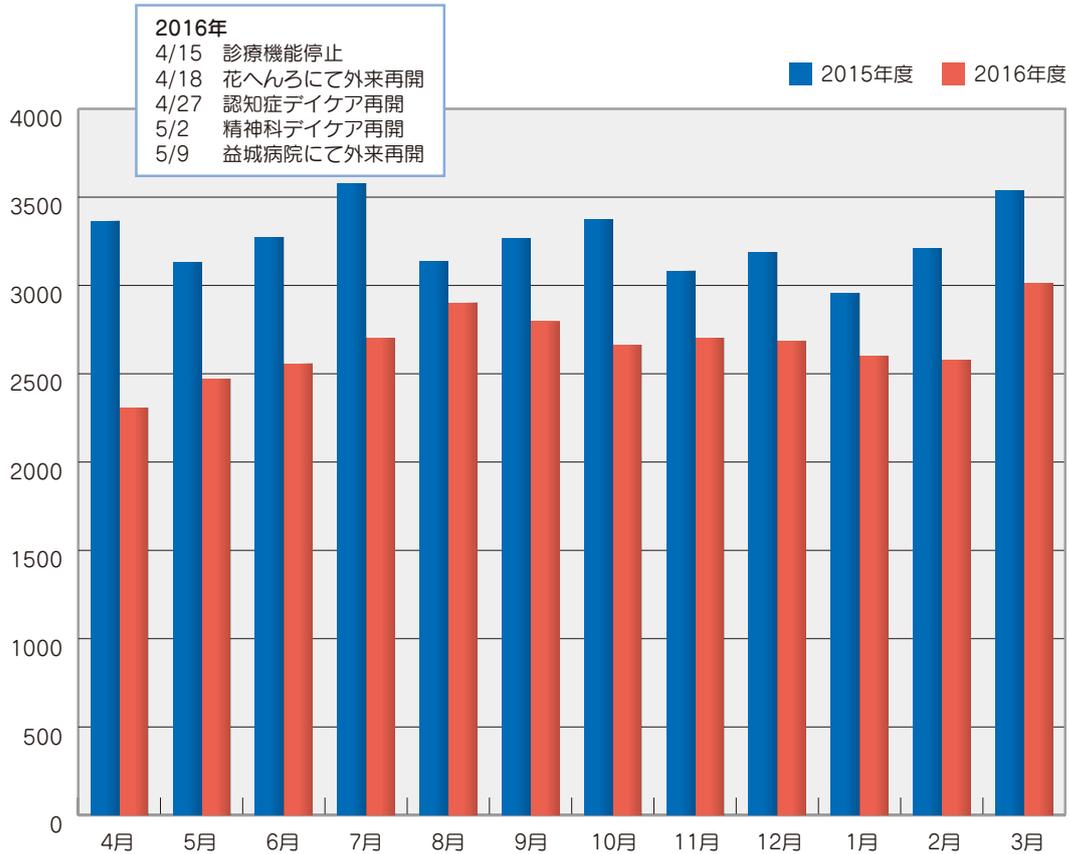
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
5/3~7/2 支援チームおかやま (医師、看護師、PSW、CP、事務 3~5名/1チーム)																														
5/9~7/2 福島県 あさかホスピタル (看護師、PSW、OT 他 2~4名/1チーム)																														
4/19~7/14 介護福祉士会・DCAT (1~6名/1チーム 花へんろ支援)																														
当時十分に記録が出来ず、記載漏れがありましたらご容赦ください。 たくさんの方にご支援を頂き、心から感謝申し上げます。																														

5 診療実績 2015年4月～2017年3月

① 月毎の在院患者延数



② 月毎の外来受診者延数

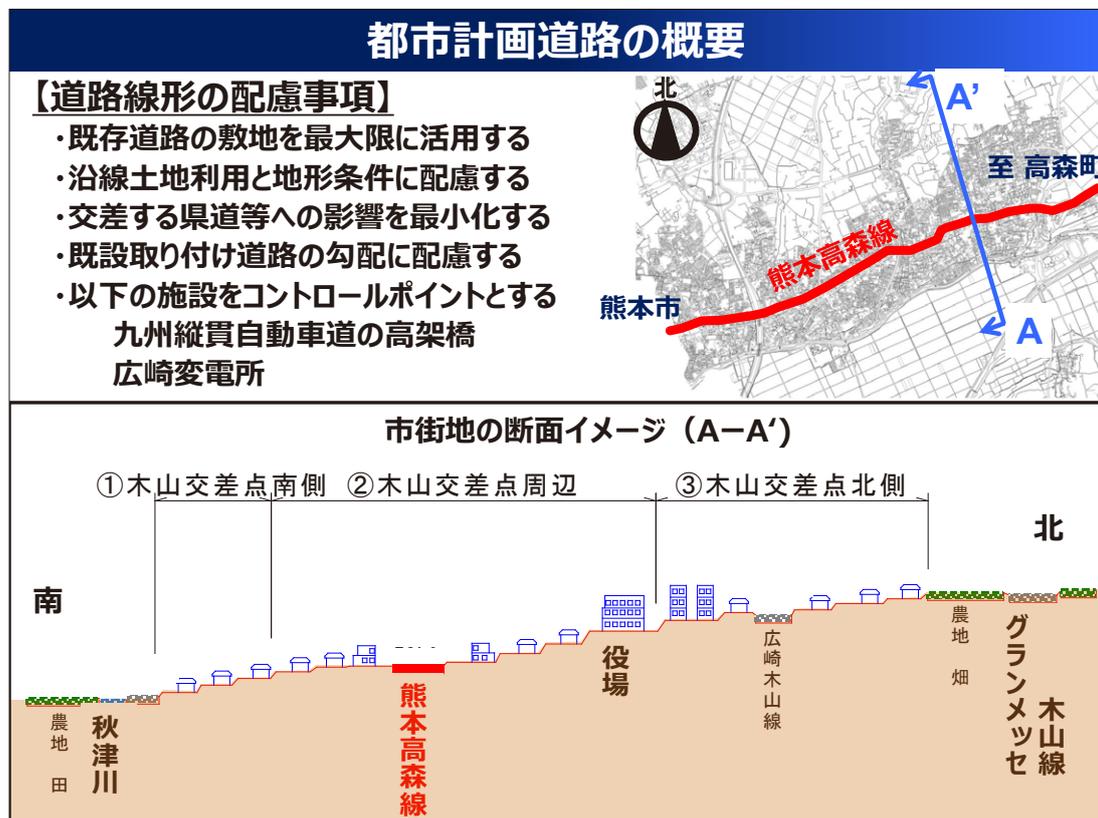


6 断層資料・都市計画道路概要

断層資料



益城町断面イメージ



断層資料：(出典)国土交通省 『熊本地震からの益城町の市街地復興に向けた安全対策のあり方に関する最終報告について』
(http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi08_hh_000034.html)

益城町断面イメージ：(出展)熊本県都市計画道路益城中央線(県道熊本高森線)ほか1線の都市計画に係る説明会資料

7 熊本地震に関連する県内外での講演・発表・投稿一覧表 (2016年4月～2017年4月)

No	日付	講演題名	場所	発表者	主催
1	4月26日	「災害時の子どものこころのケア 急性期の心理的なサポートについて」	熊本赤十字病院 小児科 PICU	医師 大平洋明 臨床心理士 尾上 美由紀	熊本赤十字病院 小児科
2	6月2日	第112回日本精神神経学会学術総会 緊急報告「平成28年度熊本地震」	千葉県 幕張メッセ	理事長 犬飼邦明	日本精神神経学会
3	6月4日	平成28年度保育所等における心のケア研修会 「災害後の子どものこころのケア」	空港保育園	医師 大平洋明	熊本県医療福祉部 子ども障害福祉局 子ども未来課
4	6月10日	日本精神科病院協会 定時社員総会 緊急報告「平成28年熊本地震」	パレスホテル東京	理事長 犬飼邦明	日本精神科病院協会
5	7月9日	第94回熊本精神神経学会熊本地震シンポジウム 「精神科病院機能と災害支援」	熊本市	理事長 犬飼邦明	熊本精神神経学会
6	7月10日	熊本地震について	熊本市	栄養管理科長 管理栄養士 井上さとみ	熊精協栄養部会
7	7月27日	自分たちを守るために ～被災者であり、支援者である方々へ～	益城町 特養花へんろ	臨床心理士 主任 小松哉子	特養花へんろ
8	8月4日	嘉島町学校保健会 総会 「被災後のメンタルヘルス つながっていく心のケア」	嘉島町福祉センター 大会議室	医師 大平洋明	嘉島町学校保健会
9	8月6日	熊本県認知症疾患医療センター事例検討会 「益城病院と関連施設における熊本地震対応」	熊本大学病院	理事長 犬飼邦明	熊本県認知症疾患医療センター
10	8月8日	熊本臨床心理学 「心のケア講座」	益城町立津森小学校	臨床心理士 古澤春美	熊本臨床心理士学会 学校心理士会熊本支部
11	8月12日	平成28年度熊本県精神科救急情報センター相 談員研修会 「精神科救急と情報センターについて」	熊本県庁会議室	理事長 犬飼邦明	熊本県精神科協会
12	8月20日	住民福祉くらしの講座:第3回 感情の取り扱い方 「自分を知りより良く生きるため」～ヒント は感情にあり～	福岡県上毛町	臨床心理士 主任 小松哉子	福岡県上毛町社会福祉協 議会
13	9月21日	熊本地震の災害体験からBCP対策について	福岡市 RICOH福岡支社	事務次長 宮崎 翔	第90回医療情報交換会
14	10月7日	平成28年度九州電力メンタル・ヘルス講演会 「震災後のこころのケア」	九州電力大津支社(熊本県大 津町)	院長 松永哲夫	九州電力
15	10月8日	熊本震災緊急シンポジウム	翠香園ホテル(久留米市)	理事長 犬飼邦明	第24回日本精神科救急学 会学術総会
16	10月11日	精神科病院の震災の現状と反省	大阪ガスエネルギー事業部	理事 田中洋子	近畿2府3県 精神科病院 協会事務長会大阪ガス株 式会社共催
17	10月14日	熊本地震 重度認知症患者ディケアにおける利用者支援 について	菊池病院	認知症ディケア 主任看護師 緒方由美	基幹型認知症疾患セン ター
18	10月15日	平成28年度 第6回益城病院院内学会 「失ったもの、得たもの、そして見えてきたこ と」	益城病院 OTホール	理事長 犬飼邦明	益城病院院内学会
19	10月15日	平成28年度 第6回益城病院院内学会 「震災百人百話～益城病院通院患者さん達の 震災体験談～」	益城病院 OTホール	院長 松永哲夫	益城病院院内学会
20	10月20日	平成28年度日本精神科医学会事務教育研修会 事務部門 「理事長として事務長に期待すること」	ホテルキャッスル(熊本市)	理事長 犬飼邦明	日本精神科医学会・日本精 神科病院協会
21	10月20日	平成28年度熊本地震の被災報告	ホテルキャッスル(熊本市)	事務次長 宮崎 翔	日本精神科医学会・日本精 神科病院協会
22	10月21日	こころの健康講座 「災害後のこころのケア」	九州電力	臨床心理士 主任 小松哉子	九州電力
23	10月29日	益城町認知症サポーター見守り体制等推進事 業 「震災後の高齢者支援と認知症サポート」	益城町保健福祉センター はびねす	理事長 犬飼邦明	拠点型認知症疾患医療セ ンター 西部圏域包括支援セン ター 合同主催
24	11月5日	日本精神神経学会 熊本地震こころのケア フォーラム シンポジウム 「熊本からの報告」～急性期から現在まで～	熊本テルサ	理事長 犬飼邦明	日本精神神経学会
25	11月6日	平成28年熊本地震の被災報告とBCP対策に ついて	益城病院	事務次長 宮崎 翔	富士ゼロックス職員研修 会
26	11月11日	平成28年度九州電力メンタル・ヘルス講演会 「震災後のこころのケア」	九州電力八代支社(熊本県八 代市)	院長 松永哲夫	九州電力
27	11月12日	「熊本地震から復興と地域作りを考える」	益城町文化センター	精神保健福祉士 古川法聖	熊本県社会福祉士会
28	11月16日	熊本地震を体験して伝えたいこと ～命があれば、どがんでんなんとだけん～	仙台国際センター	副病棟長 看護師 村添清美	日本精神科医学会学術大 会

No	日付	講演題名	場所	発表者	主催
29	11月19日	認知症・精神障がい者への支援や震災後のメンタルケアを踏まえたホームヘルパーとしての関わり方について	熊本県総合福祉センター	精神保健福祉士 田中美奈 古川法聖	熊本県ホームヘルパー後期研修会
30	11月26日	平成28年度 熊本県アルコール関連問題学会講演 「ダブル・フォルトからの挽回～依存症者の震災体験談～」	熊本県庁会議室	院長 松永哲夫	熊本アルコール関連問題学会
31	12月2日	九州精神神経学会・九州精神医療学会合同シンポジウム 「平成28年熊本地震の現状と課題」	沖縄コンベンションセンター	理事長 犬飼邦明	九州精神神経学会・九州精神医療学会
32		熊本地震の経験から精神科外来の役割を考える～外来診療機能を止めない～		外来看護師 主任 高橋富陽	
33		平成28年熊本地震からの復興～そして経験を継ぐ～		栄養管理科 管理栄養士 永田沙織	
34		災害と情報システム～熊本地震から学んだこと～		医療情報室 清野健二郎	
35	12月2日	平成28年度 熊本県連大家族会一泊研修会講演 「震災百人百話～益城病院通院患者さん達の震災体験談～」	上益城郡山都町 千寿苑	院長 松永哲夫	熊本県連大家族会
36	2017年 1月12日	熊本地震被害報告～益城病院における熊本地震の被災体験と復興への道のり～	名鉄ニューグランドホテル(名古屋)	看護部長 水田由紀	愛精協看護部長会
37	1月22日	限られた資源の中で暮らしを支援する～作業療法士の視点から～	熊本テルサ	精神科ディケア 作業療法士 主任 本村一生	熊本県医療・保健・福祉連携学会
38	1月25日	平成28年度第2回乳幼児健康診査における子どもの心のケア研修会「地震後のこどもの心理的な反応とその対応」	熊本テルサ	医師 大平洋明	熊本県医療福祉部 子ども障害福祉局 子ども未来課
39	2月4日	認知症疾患医療センター地域拠点型事例報告「熊本地震を経験して」	熊本市医師会館	理事長 犬飼邦明	熊本県地域拠点型認知症疾患医療センター
40	2月1日	被災した専門職の経験から熊本地震を考える	荒尾市医師会館	精神保健福祉士 田中美奈 古川法聖	荒尾こころの郷病院拠点型認知症疾患センター
41	2月8日	平成28年度上益城精神保健連絡会 講演「アルコール依存症者の震災後の変化」	上益城郡御船町消防局	院長 松永哲夫	上益城精神保健連絡会
42	2月17日	災害時自殺対策研修会「大規模災害と精神科病院支援」	岐阜都ホテル	理事長 犬飼邦明	岐阜県精神福祉協会
43	3月24日	危機管理研修「大規模災害に備えて」	一般財団法人創精会	体育療法士 湯原 徹	一般財団法人創精会
44	3月29日	和歌山県における災害時の精神医療支援活動研修	和歌山県看護研修センター	診療支援科長 精神保健福祉士 福島郁雄	和歌山県障害福祉課
45	4月28日	福岡県精神科病院協会 事務長会「精神科病院の災害対応計画(BCP)作成のポイント」～大規模災害を経験して思うこと～	ホテルセントラーザ博多	理事長 犬飼邦明	福岡県精神科病院協会事務長会(博多)

【論文・寄稿】

1	6月	『熊本地震の被災状況(現地からのレポート)』	とやま保険医協会新聞(佐賀県)	理事長 犬飼邦明	
2	8月	日本精神科医学会学術教育研修会 事務部門受講生募集のご案内	日本精神科病院協会ホームページ・日本精神科病院協会topic	理事長 犬飼邦明	
3	9月	「備えあれど悔いあり」	日本精神科病院協会雑誌平成28年9月時評	理事長 犬飼邦明	
4	10月	「精神科病院機能と災害支援」	日本精神科病院協会雑誌平成28年10月号	理事長 犬飼邦明	
5	12月	「熊本地震災災害支援を経験して」	「精神科救急」第20巻	理事長 犬飼邦明	
6	2017年 2月	【日本精神科医学会学術教育研修会 事務部門(平成28年10月20日)より】「理事長として事務長に期待すること＝第1部＝」	熊本精神科病院協会誌	理事長 犬飼邦明	
7	3月	「あの時わたしは」特集号発刊に寄せて	臨時広報誌	理事長 犬飼邦明	
8	5月	日本精神科病院協会誌 各地の便り	日本精神科病院協会雑誌平成29年5月号	理事長 犬飼邦明	

8 益城病院連絡掲示板 (4月15日～4月30日分を抜粋)

被災直後、出勤困難な職員もいるため、日々変化する病院の状況を職員全員で共有するため、インターネット上に掲示板を設置した。情報は毎日夕方頃に更新、6月14日までの約2ヶ月間行われた。



益城病院緊急連絡
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/15(Fri) 6:29

益城病院に出勤可能なスタッフは出来るだけ早めに出動をお願いします。
 出勤した、最初に防災本部である構内棟1Fの第3外来をお尋ね下さい。
 そこで出勤者の確認を行います。
 格好は動きやすい格好、靴等でおいで下さい。
 当面非常事態が継続することが予想されますので、着替えやタオル等も持参した方が良いでしょう。
 入院患者さんは自宅引き取り、転院等の対応を行っている最中です。
 可能な限り益城病院に出勤していただくと助かります。
 建物外部、内部は損傷が激しいので、十分注意して病院内に入ってください。

益城病院緊急連絡
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/16(Sat) 19:45

①本部移設について
 災害対策本部は花へんろ1Fに移設しました。
 対策会議は11:00から本部で行います。
 ②明日の出動について
 8:30には本部に当直者がいますので、出動される方はまずは本部に来て下さい。
 ★スタッフ数が足りていませんので、出勤可能な方は出来るだけ本部に集まっていただくと助かります。
 ★家庭用自家発電装置をお持ちで貸し出し可能な方は本部へお持ち下さい、お願いします。
 ★勝手に判断して行動しないようにしてください。
 必ず本部の確認を受けるようにしてください。

③電気状態について
 益城病院・・・非常電源OFF状態。通電していません。
 花へんろ・・・非常電源にて稼働中。(燃料は明日の朝分まで確保済)
 akai花へんろ・・・自家発電装置にて稼働中。
 ふるさと・・・自家発電装置にて稼働中。(燃料はリタン1缶分確保済み)
 ④患者動向
 益城病院入院患者・・・全患者転院。自宅退院等。本日さらに転院先から別病院へ入院した患者あり。
 コスモ・・・入所者15名+ハイス20名
 ふるさと・・・入所者17名
 花へんろ・・・入所者46名+ショートステイ6名+地域ケア+45名
 akai花へんろ・・・入所者46名

⑤食事について
 ふるさとについては栄養科でなんとか対応中。
 他救護物資等に頼る。

益城病院緊急連絡
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/17(Sun) 21:58

現状報告および明日の連絡をします。
 ①各施設状況
 益城病院・・・水、電気、ガス×
 花へんろ・・・水、電気、ガス○
 ふるさと・・・水、電気、ガス○
 コスモ・・・水、電気、ガス×、水○
 akai花へんろ・・・水、電気、ガス×、ガス○
 ふるさと、コスモ、akai花へんろの電気は自家発電装置(当院保有分、外部支援分)を使用して、電気を確保。
 ※皆様へ呼び掛けた自家発電装置の支援については、本日他病院からの支援がありましたので、不要となりました。
 水は自衛隊給水ほか、配給、支援物資、湧水等で対応。
 ②明日の出動について
 9:00に本部で全体会を行います。
 8:30には本部に当直者がいますので、出動される方はまずは本部に来て、受付をしてください。
 [下記留意点を必ずお読みください。]

★受付簿、名札を付けて医療従事者であることを分かるようにしてください。
 ★スタッフ数が足りていませんので、出勤可能な方は出来るだけ本部に集まっていただくと助かります。
 ★入手した情報は必ず本部に報告してください。情報を共有することがとても重要です。
 ★流言蜚語、根拠のない噂、デマに惑わされないようにしてください。
 ★病院内に入る場合は一人であらず、必ず複数で入るようにしてください。また、ヘルメットを装着して、自分の身は自分で守ってください。
 ★休憩出来るときはしっかり休憩しましょう。
 ★勝手に判断して行動しないようにしてください。
 必ず本部の確認を受けるようにしてください。
 ★仮設トイレは構内棟一階に5基設置してあります。ご利用下さいませ。
 ★外部者が強み目的で建物内部に入ることの可能性がります。不審者・不審物等を見かけたら、報告してください。
 ③電気状態について
 益城病院の電気は九電からの送電を切っています。

す。漏電による火災防止等のためです。
 ④明日からの外来診療について
 明日は10:00から外来を行います。外来診療の場所は花へんろ事務所です。新患は受けず、再来のみ、かつ処方箋に近い短時間診療を予定しています。電子カルテは参照モードで利用出来ます。記録、オーダーは入力指示箋を使用します。レセコンは使用出来ませんが、会計は後請求処理となります。DC、DDC、訪問看護はしばらく中止です。内容は益城病院HPにも掲載しました。
 ⑤DPAT, DMAT, ボランティア、他医療機関や公的機関、海外からの災害支援隊等がこれら充実していきますが、益城病院スタッフの心身共に疲弊している状況が続くと予想されます。外部からの支援は積極的に受ける方向とします。
 ※育児室受入は検討中です。

益城病院緊急連絡
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/18(Mon) 22:20

現状報告および明日の連絡をします。
 ①各施設状況
 ふるさと：電気復旧。
 日中は益城病院の県道沿い入口及び裏門に各二名体制で保安要員として配置。夜間は御船警察署にて見回り体制を構築通じて依頼。
 ②明日の出動について
 9:30に本部でミーティングを行います。
 8:30には本部に当直者がいますので、出動される方はまずは本部に来て、受付をしてください。
 [下記留意点を必ずお読みください。]

★自家用車は出来れば第二駐車場もしくは第三駐車場に置いて、花へんろの本部へお出下さい。
 ★駐車許可証をダッシュボード上に掲示して下さい。

益城病院緊急連絡
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/19(Tue) 20:30

現状報告および明日の連絡をします。
 ①4/19の各施設状況
 益城病院・・・構内棟の片付け作業中。構内棟と診療棟の間は空中落下の危険があるため通行禁止。
 ふるさと・・・電気、ガス○、水はペットボトルで1000L分、自衛隊より配給あり。電話×
 花へんろ・・・水道は×、地下水くみ上げにて水確保。電気、ガス、電話は○。
 akai花へんろ・・・水×、電気、電話、ガス○

②益城病院復旧について
 ・各建物の安全確認(清水建設立ち会いによる調査実施中)
 ・まず構内棟のライフライン確保
 ・避難生活の職員・家族の居場所をどうするか。
 ・構内棟での外来機能・入院機能を復旧させる。一でできるだけ早く！
 ・建物内外復旧作業
 ③勤務体制について
 震災から休みなしで連続して勤務している職員もおり、疲労度も高まっています。
 家の片付けをしないといけない状況もあり、勤務体制は2日勤務して1日休み、という基本パターンを採用決定しました。
 所長が勤務割を行いますので、各自所属長へご確認下さい。
 ④映像記録を取りましょう
 震災に際し、支援物資や被災状況などを出来るだけたくさん写真や映像に留めようとしてください。
 デジカメでもスマホでも構いません。スマホで撮影した場合は、メールで写真を送信してください。
 [下記留意点を必ずお読みください。]

★ノロが避難施設で発生しているようです。感染対策は徹底するようにしてください。かならず手洗い、指消毒を行うようにしてください。
 ★ブルーウェアが使えるようになりました。
 ★今週金曜日子ども外来は花へんろ静養室を使用予定です。

感染対策について
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 12:39

ノロウイルス等の感染予防を徹底する必要があります。
 外部から本部に戻ったときは必ず手指消毒を徹底してください。
 感染疑いの情報を得た場合は感染対策担当者へ随時報告してください。
 感染対策担当者: 小田泰徳

対策本部担当代表
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 16:24

本部長: 犬飼理事長
 副部長: 松永院長、浦崎局長、水田看護部長、伊藤相談役
 診療: 宮崎副院長
 勤務: 増田副看護部長
 記録: 宮崎次長、阿蘇副記録
 総務: 平山主任
 病院整備: 佐伯係長

情報: 廣松(医療関係)、福島(システム)
 食事: 井上科長
 マスコミ: 犬飼理事長、松永院長
 DMAT・DPAT: 犬飼理事長、松永院長
 救護物資: 村添副長、山田主任
 補給: 村添副長、林田新吾
 感染対策: 小田泰徳

日課時限(基準)
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 19:18

08:30 出勤
 09:00 全体会議(全員参加)
 09:30 本部会議(関係者)
 11:00 ラジオ体操
 12:00 昼食
 13:00 就業開始
 15:00 ラジオ体操
 16:30 全体会議(全員参加)
 17:00 退勤

※疲勞が溜まってきたら職員休憩室で休みましょう。
 ※無理はしないでください。
 ※勤務時間は基本8:30ですが、交通事情、家庭事情等により遅れることについては、所属長へ事前に連絡していただければと思います。

支援物資について
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 19:21

必要な支援物資がありましたら、廊下に掲示してある必要物資へ掲示してください。ポストイトに必要な物、数量、場所、名前を記入して、貼り付けてください。

病院内に残された必要品等について
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 19:24

病院内に残された必要品等、花へんろの方へ持ってきてもらいたいものがあり、廊下に掲示してある必要品へ掲示してください。ポストイトに必要な物、数量、場所、名前を明記して貼り付けてください。病院内に入室部隊が可能な限り確保して持ち帰ります。
 ※病院内外は危険箇所が多いため、無断かつ単独で入らぬようにしてください。

4/20 (水) 伝達事項
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/20(Wed) 19:57

①最優先事項
 ・構内棟の機能回復(ライフライン)
 ・4/24 本部機能、外来機能を構内棟1Fへ移設
 ・4/25 給食厨房機能、花へんろDS
 ・5/15 構内棟で患者受入(入院)
 ・8/1 他病棟復活
 ・自宅復帰不能かつ避難所暮らしの職員の生活支援について検討。
 ②4/21について
 ・10:00 リネン業者による寝具回収
 ・午後 自衛隊給水500L (ふるさとタンク)
 ・花へんろ避難者のルール説明(リーダーへ)
 ③各施設状況
 ・病院: 建物検査中、環境整備中
 ・コスモ: 電気、水、ガス、電話○
 ・ふるさと: 電気、ガス○、水、電話×
 ・花へんろ: 電気、水、ガス、電話○
 ・akai花へんろ: 電気、ガス、電話○、水×

4/21 (木) 伝達事項
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/21(Thu) 19:04

①今後のことについて
 ★スローガン
 (1)自分自身を守る！(職員、家族を守る)
 (2)患者さんを守る！(患者さんの受け入れ態勢を整え、病状の安定化を図る)
 ★給料は今後3ヶ月間は支給します。つきましては、ごわら8月までの病院機能復活を目指します。
 ★建築専門業者立ち会いにて、構内棟、管理棟の構造診断を行った結果、破損程度は最低レベルの小破とのこと、建物使用については問題ないという結果になりました。
 ★ロードマップ
 ・4/23 構内棟の機能回復(ライフライン)
 ・4/25 本部機能、外来機能を構内棟1Fへ移設
 ・4/25 給食厨房機能、花へんろDS
 ・5/15 構内棟で患者受入(入院)
 ・8/1 病院機能復活

職員支援体制
 ・自宅復帰不能かつ避難所暮らしの職員および家族の生活支援について検討。
 ・一泊二泊の再帰を早めに行う。院内学童臨時まき塾の開講準備も同時進行。
 ・一構内棟2Fの部屋を職員家族の仮住まいとして提供する準備を行う。
 ②明日の予定
 ・構内棟復旧調査予定(保安協会)
 ・100Kの発電機復旧(建設業者)
 ・基礎調査依頼(建設業者)
 ・全体会議後、日本病院会からの物資を済生会熊本

病院内へ取りに行く。
 ③各施設状況
 ・病院: 建物検査中、環境整備中
 ・コスモ: 電気、水、ガス、電話○
 ・ふるさと: 電気、ガス○、水、電話×
 ・花へんろ: 電気、水、ガス、電話○
 ・akai花へんろ: 電気、ガス、電話○、水×
 →リネン業者へ入室後肌洗洗依頼。(ふるさと、akai花へんろ)
 ④その他伝達事項
 ・益城町ボランティア要請について確認済み、コスモ、ふるさと、akai花へんろ、花へんろなど要入申請。(ボランティアの方々へ第二駐車場一角を貸し出し予定)
 ・第二駐車場に地域の方が避難中。4家族20名ほどがテントおよび車中泊。

4/23 (土) 伝達事項
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/23(Sat) 10:22

①今後のことについて
 4/22 病院職員避難受入開始(構内棟2F)
 4/23 育児室受入開始
 4/25 院内学童臨時まき塾開講(構内棟2F)
 4/27 本部 外来機能を病院へ移転
 ②病院施設状況
 構内棟 電気×、水×(電気来通中復旧予定)
 DC棟 電気○、水×
 管理棟 電気○、水×
 外来棟 電気×、水×(電気来通中復旧予定)
 病棟本館 電気○、水×
 育児室 電気○、水×
 ③各施設状況
 ・コスモ: 電気、水、ガス、電話○
 ・ふるさと: 電気、ガス○、水、電話×
 ・花へんろ: 電気、水、ガス、電話○
 ・akai花へんろ: 電気、ガス、電話○、水×
 ④その他
 ・4/23 水1.7トン自衛隊より給水予定。
 ・連絡掲示板へのいたずら書き込み多発のため、ID、PWを指定。
 ・4/23の育児室預け入れ乳幼児は5名。
 ・構内棟復旧申込書→本部受付で受け取ってください。
 ・院内学童臨時まき塾利用申込書→本部受付で受け取ってください。
 ・ボランティア人員配置 要請については熊本科長窓口。
 ・簡易トイレを8基追加して合計13基、うち5基はakai花へんろへ本設置予定。清掃やトイレトペーパー補充をよろしくお願いします。

4/23 (土) 伝達事項 No.2
 投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/23(Sat) 18:17

①病院施設状況
 ・2病棟、3病棟、DC棟、精算カウンター、外来周環境整備中。
 ・構内棟は非常電源使用可能。
 ・ふるさと、アクトニオ1F施設以外はトイレ、流し使用不可。
 ・4/24 電気工事業者と打合せ(構内棟への高圧線引き込みについて)
 ・本部受付への連絡用に携帯を設置しました。
 ・一泊二泊受入体制について
 ・一泊二泊へ連絡した保護者は育児室直通臨時携帯へおかけください。
 ・育児室のトイレが使用不可なので、仮設トイレへ連れて行く必要があり、育児室の人手が不足する可能性があります。子ども5人に大人1人体制を基本にしたいと思っております。職員の皆さんにもご協力をお願いします。
 ③院内学童臨時まき塾について
 ・まき塾の申し込みは本部受付でお願いします。
 ・講師は2名体制とします。職員やボランティアで講師を対応したいと思っております。職員の皆さんにもご協力をお願いします。
 ・場所が構内棟ですが、明日確定したと思います。
 ・まだ預け時間や連絡体制等も明日確定次第、メールおよび掲示板等でお知らせしたいと思います。

④iハウスについて
 ・iハウスは水がいずれば施設も×。トイレ排水等が×。
 ・iハウス10、11、21は比較的早めに復旧しそう。
 ・iハウス1、2は復旧に時間を要する可能性があります。
 ・iハウスの裏側壁が倒壊しており、隣接する宅地側に倒壊している。給湯器などが倒れている。ブロック塀の撤去を週明けにでも職員、ボランティアで実施予定。
 ⑤病院警備体制について
 ・4/24より夜間巡回を病院敷地内の建物周辺の夜間巡回を警備会社へ委託。
 ・21:00～23:00の1回、3:00～5:00に1回の夜間巡回を行う。
 ・4/24の日に警備会社が見下りに来れます。
 ⑥その他

・本日15:00頃に日精協山崎会長がお見舞いにて来所。松永院長が対応されています。
 ・マスク対応については、本部(理事長、院長)へご確認ください。
 ・熊本県弁護士協会災害Q&Aにて生活支援(補助、支払い、税金、保険等々)について詳細が掲載されていますので、お知らせ致します。下記URLにPDFにて掲示されています。
<http://goo.gl/F8c9qL>

4/24 (日) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/24(Sun) 18:20

①挨拶運動について
 ・朝の全体会の最後は「がんばれ熊本! がんばれ益城! よろしくお願ひします!」の唱和。
 ・夕の全体会の最後は「がんばれ熊本! がんばれ益城! お疲れ様でした!」の唱和。

②5月勤務について
 ・5月勤務は9日週休での勤務作成となります。
 ・5/15の橋樑機能回復を目指した勤務組みとなります。
 ・もちろん橋樑機能回復は5/15を待たず出来るだけ早めの復旧を目指します。

③病院施設状況
 ・病棟、DC棟、水、情報室周辺の環境整備中。
 ・4/27までに橋樑棟、外来診療棟への電気復旧予定。
 ・4/27に本部機能、外来診療を外来診療棟へ移設。

・下水排水について要調査。ふるさと、アントニオ1Fもトイレ使用中。
 ・コスモ断水中。明日中には復旧予定。
 ・仮設トイレ→橋樑棟1Fピロティの5基は女性用、栄養科非常階段前の3基は男性用。

④院内学童臨時ましまし塾について
 ・4/25より受付開始。
 ・子供の預かりは8:30~9:00に本部に連れてきてください。
 ・お迎えは16:30~17:00に本部にお迎えにきてください。

■持ってくる物
 ・勉強道具(自習用ドリルや教科書など)
 ・お弁当、飲み物、おやつ
 ・着替え、タオル

■場所は橋樑棟4Fリラクゼーションルームです。

⑥その他
 ・4/24より警備会社が夜間巡回を2回実施。
 ・職員の間合いの方が4/26の夕食、4/27の昼食、夕食の炊き出しを実施予定。
 ・4/25にチャッスルの高藤社長がお見舞いに見える予定。カップラーメンの美味しい調理方法を伝授する予定です。

・写真撮影をお願いします!
 →工事中の写真、片づけの写真、物資支援の写真、お見舞いやマスク来所時の写真等々。
 →写真は指定した病院メールアドレスへ送って下さい。

4/25 (月) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/25(Mon) 18:58

①病院施設状況
 ・本日は管理棟を中心に環境整備を行いました。
 ・管理棟の職員更衣室、PSW室、事務所、図書室、情報室など環境整備中。
 ・カルテ庫、施設、秘書図書室は要整備。

②下水排水について
 ・ふるさと、アントニオ1Fは少量だったら流すのはOK。
 ・下水排水が確認出来ない病棟や施設関係については、トイレ処理剤等を活用する。

③電気について
 ・管理棟、診療棟は漏電チェックを完了。
 ・今後の作業は高圧線引き込み作業予定。
 ・故障していると思われる機器はコンセントを外しておく。

④ハウスについて
 ・ハウスのブロック塀倒壊については業者手配。
 ・院内埋め戻しについては、配管断裂は治して埋め戻しを行っている。
 →雨による靴裏の汚れについては、院内建物に入る際に靴を履き替える等の対応が必要。

⑤今後について
 ・本部、外来機能移設は4/29に予定変更
 ・外来機能はG.W.明けより本格的に行う。主治医診察に戻し、新患受入を行う。

・へき地診療は今週より再開。
 ・DDCは4/27よりDC棟1Fで再開。

⑥通信環境について
 ・ネットワークは管理棟、DC棟、病棟本館、診療棟、育児室ビル、橋樑棟の通信テスト完了。いずれも通信可能。
 ・電話交換機は完全故障。仮設置にて対応可能。
 ・ふるさとへの直通電話回線不能状態について改善検討。

⑦診療体制について
 ・本日の外来数は100名超え。これからG.W.前となり患者増の可能性があり、4診体制へ、花へんろ静養室を診察室として使用する。(PC、プリンタ設定完了)

4/26 (火) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/26(Tue) 19:26

①病院施設状況
 ・役職者の部屋等を中心に環境整備。
 ・売店は来週あたりに再開を目指して整備。
 ・ふるさととは電気、ガス、水、通信×。

・ふるさとへの直通電話をふるさと携帯電話へ転送設定完了。
 ・アントニオは電気、ガス、水、通信×
 ・アントニオへの直通電話をアントニオ携帯電話へ転送設定完了。
 ・アントニオの下水排水は使用可能。
 ・コスモは水の飲用のみ×。

・ハウス1は水×、電気、ガス、OK。
 ・ハウス2は水、電気×。屋根瓦落下の恐れあり。ブルーシートを業者にてカバー予定。
 ・ハウス10、11は水、電気、ガスOK。
 ・ハウス21は電気、水×(ガスなし)
 ・宇田は電気、水×(ガスなし)

・花へんろはライフライン全てOK。
 ・ふるさとから花へんろへ入居者1名移送。
 ・akai花へんろは水×。タンク設置により給水環境OK。

②ライフライン
 ・橋樑棟へ高圧線引き込み作業。
 ・明日、診療棟へ高圧線引き込み作業予定。
 ・電話交換機は故障にて代替え機を業者へ手配。

③育児室
 ・1日宅に家族が居て、面倒を見ることが出来る場合は、出来るだけ自宅まで来て欲しい。
 ・申し込み無しで突然育児室に連れてくる方がいるので、事前に本部に申し込みをしてください。
 ・休む場合は育児室に直接連絡をお願いします。

④診療関係
 ・診療に時間がかかるケースが増えている印象。
 ・引き続き4診体制で診療を行う。
 ・明日から九大支援チームと熊本医師の診療支援あり。

⑤厨房関係
 ・厨房は電気OK。
 ・4/27に日通プロパンガス調査。
 ・5/2に厨房機器修理予定。

⑥組織体制について
 ・診療機能:主)松永院長 副)宮崎副院長
 ・施設関係:主)犬飼理事長 副)浦崎局長
 ・事務総括:主)宮崎次長 副)伊藤相談役

・経営人事:主)小田次長 副)平山主任
 ・法務:主)伊藤相談役 副)林田新吾
 ・入院機能:主)大平医師、松本医師、水田看護部長、金子病棟長、福島科長

・施設基準関係:主)佐伯係長 副)橋本直直
 ・人事労務:主)宮崎次長 副)林田新吾
 ・在宅関係:主)宮崎副院長、橋本科長、古閑室長

・施設関係:主)村上主任
 ・関連施設:主)増田副看護部長、副)園田施設長

⑦その他
 ・明日病院周辺隣接住宅へ挨拶回り。(水田看護部長、宮崎次長)
 ・夕方に帰る際、病院携帯を本部に置いて帰られる場合は、電源をオフにしてください。当直者が対応出来ない場合があります。
 ・全体会議開催時は、廊下へ待機せず、部屋に入ってください。

・昼食は花へんろ玄関→事務所前あたりで取らないようにしてください。本部が本部前の廊下で昼食を取るようお願いします。

4/27 (水) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/27(Wed) 18:35

①病院施設状況
 ・診療環境整備中。
 ・レストラン大河のガス点検終了。使用可能。
 ・電気は院内建物全て使用可能。
 ・近隣住民へ挨拶回り実施(水田看護部長、宮崎次長)

②給食について
 ・5/2より長崎のほっとキッチンにより給食提供開始。
 ・物流にて5/1にクロネコヤマトの物流センターに納品。当院職員が毎日取りに行く必要あり。(担当者を決める)

③外来について
 ・本日は87名の再来。

④引っ越しについて
 ・引っ越し日程については明日決定。
 ・引っ越しにおける課題は次ぎの通り。
 1) 建物内の安全性の確保(職員安全第一)
 2) ライフライン(電気)の安全性の確保
 3) 引っ越しアクセスの確保(搬入経路や搬入口の確保)
 4) 天候

⑤その他
 ・夕方に帰る際、病院携帯を本部に置いて帰られる場合は、電源をオフにしてください。当直者が対応出来ない場合があります。
 ・全体会議開催時は、廊下へ待機せず、部屋に入ってください。

・昼食は花へんろ玄関→事務所前あたりで取らないようにしてください。本部が本部前の廊下で昼食を取るようお願いします。

4/28 (木) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/28(Thu) 18:41

①病院施設状況
 ・薬局裏、DC棟、カルテ庫環境整備中。

②引っ越しについて
 ・明日引っ越しを実施。
 ・本部は研修センター。

・サーバーはカンファレンスルーム。
 ・10時までにサーバーを先に移動。
 ・午前中にも作業分担して運搬。
 ■移動するもの

・サーバー、パソコン、プリンタ関係
 ・指示物
 ・診療情報書類関係
 ・備品
 ・ホワイトボード
 ・机、イス(あれば)
 ・物資(花へんろと病院との仕分けをどうするか)

③ライフライン関係
 ■給排水について
 ・高架水塔までの配管は問題なし。
 ・高架水塔から各建物への配管は要修理。
 ■エレベーターについて
 ・橋樑棟使用可。
 ・病棟本館使用可。
 ・ふるさと使用可。
 ・DC棟使用可。
 ・管理棟使用可。
 ※余震が続いているので、人の乗車は避けて、物だけ載せるようにした方がよいです。

④ネットワークについて
 ・医療情報室や外来診療棟の通信確認OK。
 ・医療情報室やDCの通信確認OK。

⑤給水関係
 ・レストラン大河の200Lタンク設置。
 ・明日、山鹿水道局より給水予定(1500L)

⑥診療関係
 ・本日の外来は108名。

⑦ましまし塾について
 ・明日の集合は花へんろ。解散は益城病院外来診療棟1Fのラウンジにしたいと思います。
 ・明日以降については、決まり次第ご連絡します。

⑧その他
 ・第2外来棟の壁倒壊処理は5/3に業者が施工予定。
 ・ハウスの隣家より壁倒壊により給水ポンプが押しつぶされており、水道が使えない状況なので早めの撤去を要請あり。業者に依頼済みだが遅れている状況。

・夕方に帰る際、病院携帯を本部に置いて帰られる場合は、電源をオフにしてください。当直者が対応出来ない場合があります。
 ・全体会議開催時は、廊下へ待機せず、部屋に入ってください。

4/29 (金) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/04/29(Fri) 20:19

①休みと特休について
 ■休みについて
 ・4/15~5/14は10日間の休み(2日出勤して1日休む)の結果とします。

■特休について
 ・自宅の片づけ等よりも病院復旧を優先に出動された職員もおります。特に不眠不休で対応されたり、避難所生活、車中泊生活を余儀なくしながら、自宅復帰もままならない状態で出動された方には、優先的に休んでいただくため、是非G.W.を利用して、家の片づけ等を目的とした最大3日の特休付与します。(常勤の方対象)

・家の片づけ等が必要で特休を取得する場合は、所定申し出て下さい。(連日取得、単発取得いずれでも構いません)。ただし、業務状況等によっては部門長、所属長の判断により取得日の変更をお願いする場合があります。

②災害見舞金について
 ・本日より本日より被災見舞金を支給いたします。被災状況区分A(自宅倒壊等で帰宅不可の方)に該当する方は少しだけ割り増しにしております。
 ・本日受領できなかった方は週明け平日に総務からお受け取りください。

③ましまし塾について
 ・ましまし塾の集合、解散は外来診療棟1Fラウンジでお願いします。

④昼食について
 ・炊き出し等は本日で終了となります。明日から各自持参をお願いします。
 ・9日よりジャスミンのお弁当を販売予定です。注文は本部で受け、販売場所は外来診療棟1Fラウンジを予定しています。

⑤職員の避難所について
 ・本日より宇田(そら)に2家族入居中です。(1家族は橋樑病棟から宇田へ移動)

⑥外部からの支援について
 ・物資については、必要な物、必要な数を洗い出しして、物資担当者へ申し出て下さい。今は災害非常時などの様々な支援体制が整っています。是非、活用しましょう。

・ボランティア、DPAT等についても支援を積極的に受け入れましょう。外部支援を受けて、当院職員が休めるよう体制を整えたいと思います。

⑦私たちの心構え(松永院長より)
 (1) 現実を見極める心のゆとりを持つ
 (2) 一緒に泣き笑いでできる仲間と情緒的な絆を持つ
 (3) ユーモア(笑いでなく、違う見方ができる)を持つ
 (4) 楽観主義(今日一日をとりあえず頑張る!)

⑧エレベーターについて
 ・余震が続いているので、いずれのエレベーターも物だけの移動に使用して、人の乗車は当面見合わせ方がよいです。

⑨サッカー日本代表監督ハルルホジッチ監督来院。
 ・5/5(午後)にハルルホジッチ監督が障害者フットサルイベントにて来院予定。

・会場はグリーンサム(グラウンドゴルフ場でフットサルイベント)。
 ・県内障害者フットサルチーム5~6チームで復興イベント試合を行う。

⑩外来再開について
 ・検査室へ入る回数取替予定。
 ・第2駐車場の入口付近は外来患者さんの駐車場になりますので、職員は出来るだけ奥から詰めて駐車をお願いします。また第3駐車場を利用してください。
 ・外来の入口付近に案内係等が必要なので事務所で担当者を決めて下さい。
 ・外来の案内等が必要なので、県道沿い入口、裏口に引き続き保安要員を2名お願いします。
 ・外来やトイレ等の誘導案内看板の設置が必要です。

⑪その他
 ・本部は研修センター Aに移動済み。
 ・サーバーはカンファレンスルーム。カンファレンスルームのドアからの出入りは出来ません。
 ・各システム使用可能。

・全体会の場所は本部もしくは外来診療棟1Fのいずれかを検討中。
 ・職員休憩は本部、橋樑棟1Fコミュニケーションルーム、外来診療棟2F廊下等を充てたいと思います。

・5/1より出退勤はICカードによる打刻をお願いします。
 ・長崎のほっとキッチンより給食支援が5/2分より開始されますが、食料配送は大河まで運んでくれるようになります。(当初は益城配送センター止め)

・病院車両は第2駐車場の一角に駐車予定。(もしくは芝生広場)
 ・第1駐車場は壁倒壊等の危険があるため使用禁止です。

・多目的室にあるマイク、スピーカーを本部へ移動しています。新酒会で使用の場合は、本部より借りてください。
 ・内線、外線は使用可能。
 ・5/2より外線は固定電話を使用。夜間帯は携帯転送を行います。コスモ当直者による対応をお願いします。

・夜間防犯目的で建物の1F部分の照明の一部付けたままします。(本日は外来診療室を付けてあります)

・夜間訪問担当の方は戸締り確認をお願いしたいと思います。チェック箇所は別紙作成予定です。
 ・全館放送について要チェック。
 ・(自動)火災報知器については要チェック。

4/30 (土) 伝達事項

投稿者: 益城病院災害対策本部
 投稿日: 2016/05/01(Sun) 10:03

①施設関係
 ・橋樑棟2階の一室にトイレ排水があらたにつながらず、バケツ使用可能になりましたが、職員はできるだけ仮設トイレを使用してください。
 ・夜間の照明について工夫を。

②第一駐車場
 ・第一駐車場のよう壁倒壊の危険あり、業者が現場確認。
 ・アイハス1のブロックは撤去済み。
 ・橋樑棟ガス漏れあり。要調査。

・事務部は、診療棟ラウンジ(旧売店フロア)、総合受付、総務、医事、経理が移動済み。
 ・育児室ビルのエレベーターは、人は乗らないように。管理棟のエレベーターは、ものに限っても使用不可。

・橋樑棟は、一階から拭きあげるので土足厳禁。正面玄関にスリッパを置きます。
 ・スリッパが足りないなので、個人用ではなく全休用にしてあります。
 ・リネン類は、残り1病棟北側集めています。5月2日収集予定。

・夜間の警備 ガードマンを雇っているが、2回の巡回で警備もかかため、男性職員が勤務で担当するのはどうか。
 ・院内車庫の管理と駐車場の整備を検討。

③診療関係
 ・第2外来は、明日移動を検討。
 ・第3外来を子ども外来として整備を。
 ・5月16日からの入院受け入れ調整を早めに行う。

④会議関係
 ・来週月曜日に、臨時医局会、管理部会議開催予定。
 ・月曜日から、1病棟(または橋樑棟)のデイルームで全体会を行うことを検討。

⑤その他
 ・栄養管理科 5月2日より職員向けのお弁当を作ることにになりました。1食350円。全体会の際に申込用紙を用意します。1日、500食位、望まぬ場合は毎日作ります。
 ・事務部の赤いデジカメが紛失。
 ・消臭スプレー(携帯用)は、一人一つずつお持ちください。

・支度物箱、毛布が届いています。トリアージAの作り一枚ずつもらってください。
 ・花へんろからの移動は完了しましたが、不明なものは、残しているものもある。
 ・物資は、補充をして、担当者に足りないものを申し出て、いただけるものは出来るだけいただくようにしましょう。
 ・業務用衣類乾燥機を職員が使えるようにしてはどうするか。
 ・職員休憩室の確保を、一病棟1階奥と1病棟に用意済み、電子レンジ、電気ポット、カップ麺など置いてあります。

・akai花へんろ 三日ぶりに1.5tの給水あり。町と話して2日おきに 来てもらうことになりました。



ど根性ひまわり

2016年6月上旬、福島県いわき市の舞子浜病院からひまわりの種が贈られた。東日本大震災の津波の塩害にも負けず逞しく育った“ど根性ひまわり”は、8月に益城の地で大輪の花を咲かせた。

編集後記

熊本地震後1年、県・町の復興計画が発表され、やっと病院の移転が決定しました。かつてない災禍に苦しんだ記憶を後世に伝え、忘れ得ぬ記録として残すことにしました。多くの情報、また、各職員の取組を全て掲載したい思いはあるものの、やむを得ず多くを割愛、修正しています。大きな反省として、地震後、怒濤のように押し寄せる支援物資、報道関係による取材、ボランティアの方々への対応の拙さを露呈してしまいました。お許しください。また、ご支援いただきながらお礼が届いていない多くの方々に改めて深くお詫びいたします。益城病院の被災後の1年を振り返り、職員、患者さん、善意を頂いた方々、本当にありがとうございます。(田中)

【益城病院広報誌制作委員】

田中 洋子 宮崎 翔 小幡 祐子 廣松 直美 吉良 明子 阿蘇品 直文

益城病院臨時広報誌『あの時わたしは』

発行日/2017年4月15日

発行/社会医療法人ましき会 理事長 犬飼邦明

編集/益城病院広報誌制作委員

ディレクション/堀地 久美子

制作・印刷/株式会社 河田印刷



MASHIKI HOSPITAL

社会医療法人ましき会

益城病院

〒861-2233 熊本県上益城郡益城町惣領1530

TEL.096-286-3611 FAX.096-286-8145

<http://www.mashiki.jp>